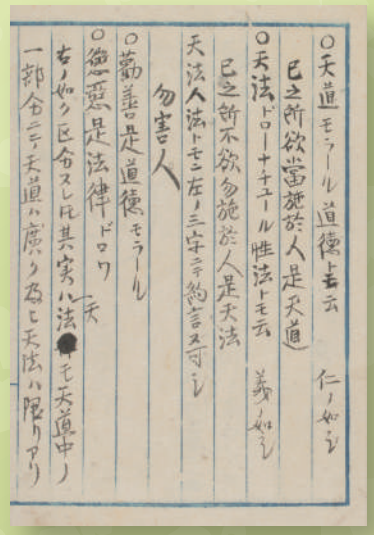
企画展

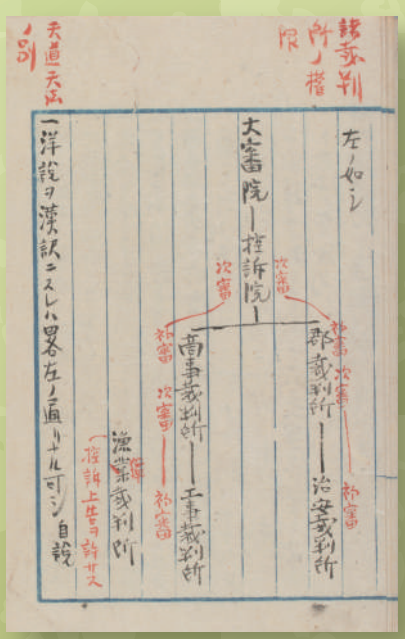
# 三島中洲と近代

Chushu Modern

―其十―

## 三島中洲の法律関係資料



企画展

三島中洲と近代　其十

# 三島中洲の法律関係資料

# 目次


（はじめに）　3

三島中洲の法曹時代とその法律関係資料　町　泉寿郎

Ⅰ　（三島中洲法律関係資料）　4～26

*1*『万国公法』四巻六冊　慶応元年刊　明治四年印
*2*『国法汎論』　加藤弘之訳　明治五年刊
*3*『改定律例』二巻　明治六年刊
*4*『仏国政典』十二巻　箕作麟祥閲　明治六年
*5*『仏蘭西法律書　民法』十六巻　箕作麟祥訳　明治三年刊
*6*『民法会議筆記』二十四冊　明治八～九年写
*7*『民法会議筆記』一冊　明治八年三月・四月写
*8*『（仏国ノボアソナード氏）仏蘭西民法講義聴書』一冊　明治八年十二月～同九年一月写
*9*『仏蘭西民法講義　売買ノ部』三冊　明治九年頃写
*10*『仏蘭西民法講義　売買ノ部』一冊　明治九年頃写
*11*『民法』一冊　明治九年頃写
*12*『物権人権ノ別』一冊　明治初期写
*13*『民刑法律聞見随録』一冊　明治九年十月写
*14*『仏蘭西法律書　民法講義』黒川誠一郎講　明治九年活刊
*15*『法令・民法財産取得編・民法人事編』一冊　明治二十三年活刊
*16*『民法草案』合一冊　明治二十一～二十三年頃　青焼印
*17*『仏蘭西法律書　訴訟法』八冊　箕作麟祥訳　明治六年刊
*18*『仏蘭西法律書　商法』五冊　箕作麟祥訳　明治七年刊
*19*『仏国ブスケー氏商法講義聞書』一冊　明治九年二月写
*20*『国立銀行条例　附成規』一冊　大蔵省　明治五年刊
*21*『仏蘭西法律書　治罪法』六冊　箕作麟祥訳　明治六年刊
*22*『訴訟受不受理表』一冊　明治八～十年頃写

Ⅱ　（その他の資料）　27～30

*23*三島中洲『霞浦游藻』一巻　明治九年刊
*24*三島中洲『中洲講話』一冊　明治四十二年刊
*25*三島中洲『中洲文稿』第一集・第二集　各三巻三冊　明治三十一年刊
*26*三島中洲書簡巻（尾立維孝宛）一巻　明治二十二～二十三年

Ⅲ　（関連書作品）　31～38

*27*★山田方谷書幅　七言絶句「（楠公）」　嘉永五年作
*28*★備中松山藩儒者漢詩幅（五弓雪窓旧蔵）
*29*★三島中洲書幅　七言絶句　文久三年作
*30*★三島中洲書幅「（岳飛）」　明治三～四年頃
*31*★三島中洲書幅　七言絶句「癸酉賜暇中遊銚港」　明治六年八月作
*32*★三島中洲書幅　七言律詩「乙亥歳抄書感」　明治八年十二月作
*33*★三島中洲書幅　七言絶句三首　大正五年七月作
*34*★三島中洲書幅　七言絶句「八十八自寿作」　大正六年作

Ⅳ　（資料編）三島中洲書簡巻（尾立維孝宛）　39～40


**凡例**

一、本書に収録した資料のうち、個人蔵の資料には★を附した。
一、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体などの通行字体を基本とした。
一、人物の呼称は、比較的通行しているものに従い、姓名・姓号の統一はしなかった。
一、本書は二松学舎大学の大学資料展示室の企画展「三島中洲と近代　其十」（期間 2025/2/17～2025/4/19）の展示図録を兼ねるものである。

# 三島中洲の法曹時代とその法律関係資料

二松学舎大学教授・大学資料展示室運営委員会委員
町　泉寿郎

## はじめに

三島中洲は今日では漢学者・教育者としての印象の強い人物であるが、彼が明治五年七月に新政府から徴命を受けて東京に出た時は、九月十三日に司法省七等出仕を拝して裁判所聴訟（民事裁判官）となっている。十一月二十四日に東京裁判所の聴訟となり、翌六年には三月三十一日に権少判事に任じられて、その五月から明治八年まで新治裁判所の所長として土浦に勤務した。八年四月二日に東京裁判所の聴訟に転じて東京に移り、五月に七等判事、六等判事に累進し、六月に麹町区一番町（現千代田区三番町）のもと旗本屋敷を購入して居を構えた。十月からは民事課を兼務して「訴訟規則」を起草した。更に九年二月十日に大審院民事課に転じ、翌十年六月二十八日に大審院判事が廃官となるまで在職した。その後、同年十月十日に「自活」のために漢学塾二松学舎を開塾する。次いで、東京大学に漢学を講じた時期を挟んで（明治十二年二月から同十九年三月二十五日まで）、二十一年三月七日に検事となって大審院に勤務し、二十三年十月二十二日に休職となるまで旧民法等の修正作業に従事した。休職して以降、中洲は「風流判事」とも号するようになる。

また、三島中洲自身、次の通り六期にわたる学歴中に法学を位置付けており（「余の学歴」）、法曹の履歴と法学知識は中洲を考える上で決して忽諸すべきではない。

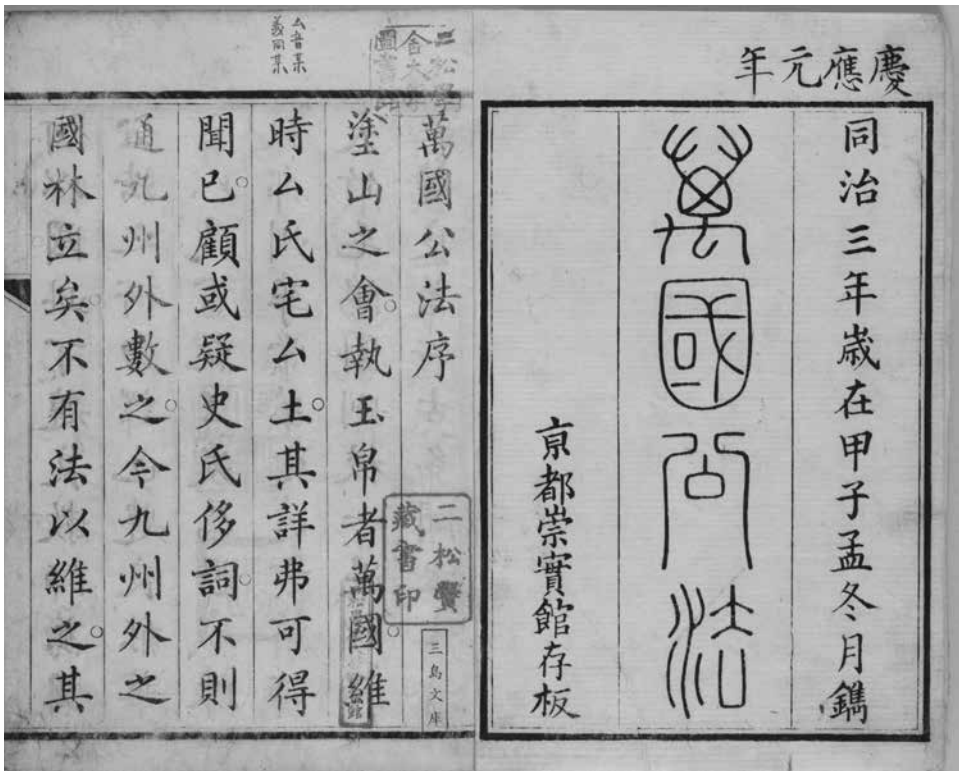
① 備中松山藩で山田方谷に師事した朱子学時代（中洲十四～二十三歳）
② 伊勢津藩に遊学し斎藤拙堂に師事した折衷学時代（中洲二十三～二十七歳）
③ 昌平黌遊学中に諸儒を歴訪した人脈形成時代（中洲二十九～三十二歳）
④ 備中松山藩に仕官して山田方谷から陽明学に基づく実地運用の指導を受けた時代（中洲三十二～三十八歳）
⑤ 新政府で裁判官として実地に法学知識を得た時代（中洲四十三～四十八歳）
⑥ 二松学舎を開塾して道学に復帰し陽明学を主張し訓詁学を折衷した時代（中洲四十八歳以降）

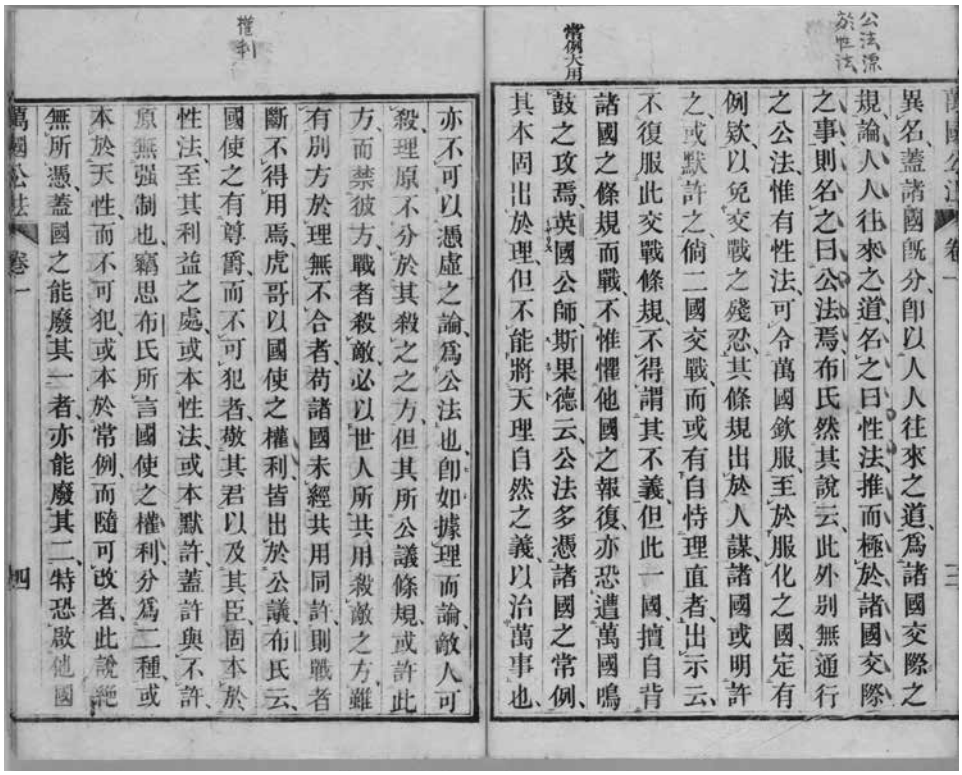
上記のような法曹としての経歴を反映して、本学には六十四種一八七冊にのぼる「三島中洲法律関係文書」が残されている。そこで十回目となる今回の企画展「三島中洲と近代」では、その中から主要な資料を展示することとした。明治初年の資料としては、箕作麟祥訳『仏蘭西法律書』などボアソナードやブスケら御雇外国人による法学講義の際に使用されたテキスト類や聴講ノート類が多数残されており、当時の民法・商法・訴訟法・治罪法など各種法典の具体的な摂取状況が知られ、また文書に残る大量の書入れからは裁判実務を担当するにあたって三島中洲が実地にどのように法学を学んだかを知ることができる。旧民法等の法典編纂に関与した明治二十年代の資料は必ずしも多くないものの、旧民法の施行延期に対して中洲が「慨歎」を漏らしている資料も興味深い（**資料26**）。

今回の展示が、明治期において西洋法学の摂取に漢学的素養がどのように作用したかを考察する事例の紹介として、また漢学以外の三島中洲の側面を照射する機会となれば幸いである。

令和七年二月十七日

# Ⅰ（三島中洲の法律関係資料）

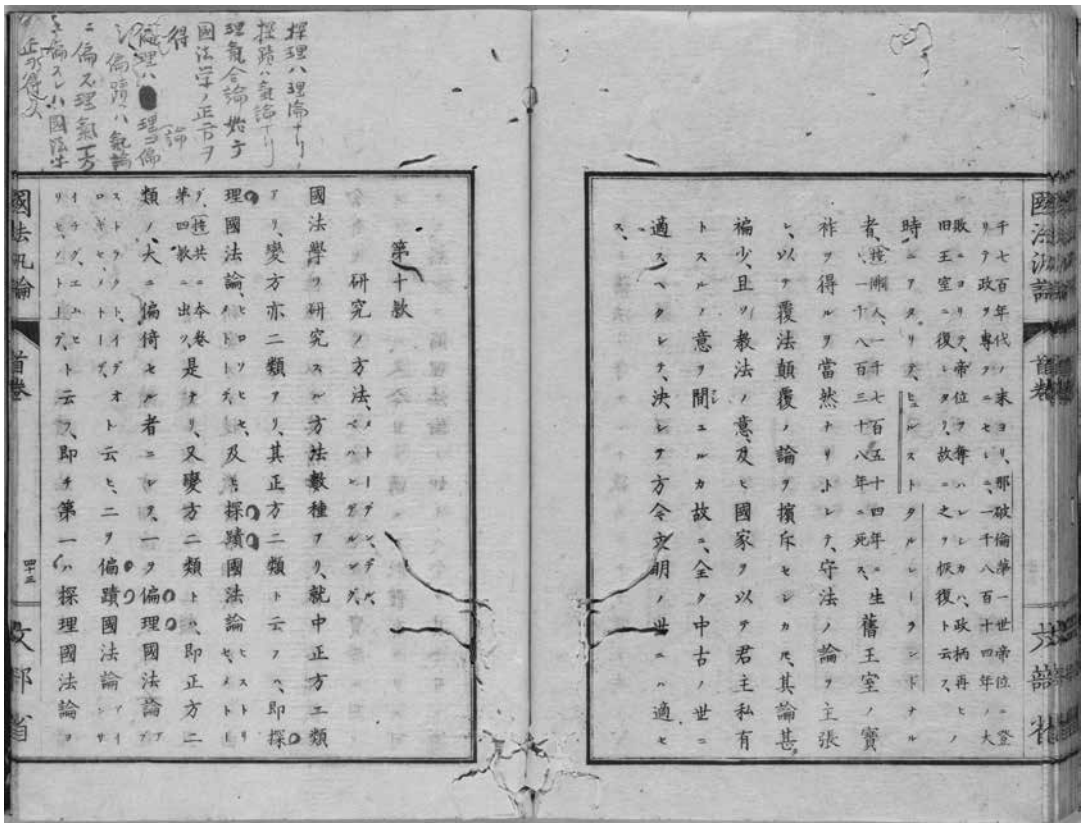



## *1*　『万国公法』四巻六冊

美国恵頓（イートン）撰　丁韙良（マーティン）等訳
慶応元年拠同治三年京都崇実館刊本重刊　明治四年東京老皂館萬屋兵四郎印本

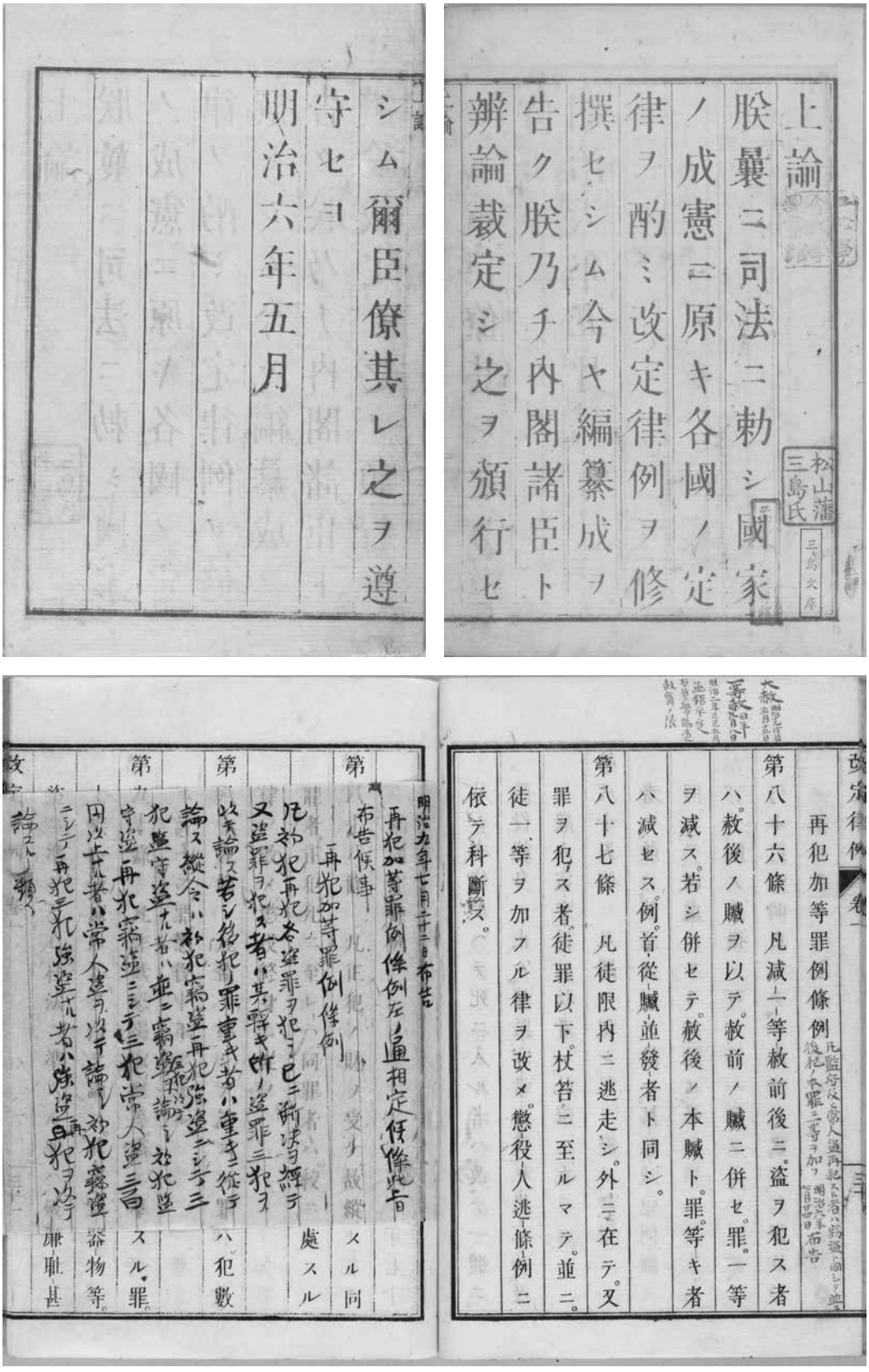
巻一釈公法之義、巻二論諸国自然之権、巻三論諸国平時往来之権、巻四論交戦条規からなる。
第一冊・第三冊に三島中洲の朱筆による書入れ・傍点などが見られる。



## 2 『国法汎論』存首巻・巻六・七・九

イ、カ、ブルンチュリ（ヨハン・カスパルト・ブルンチュリー）著　加藤弘之訳
明治五年文部省刊本

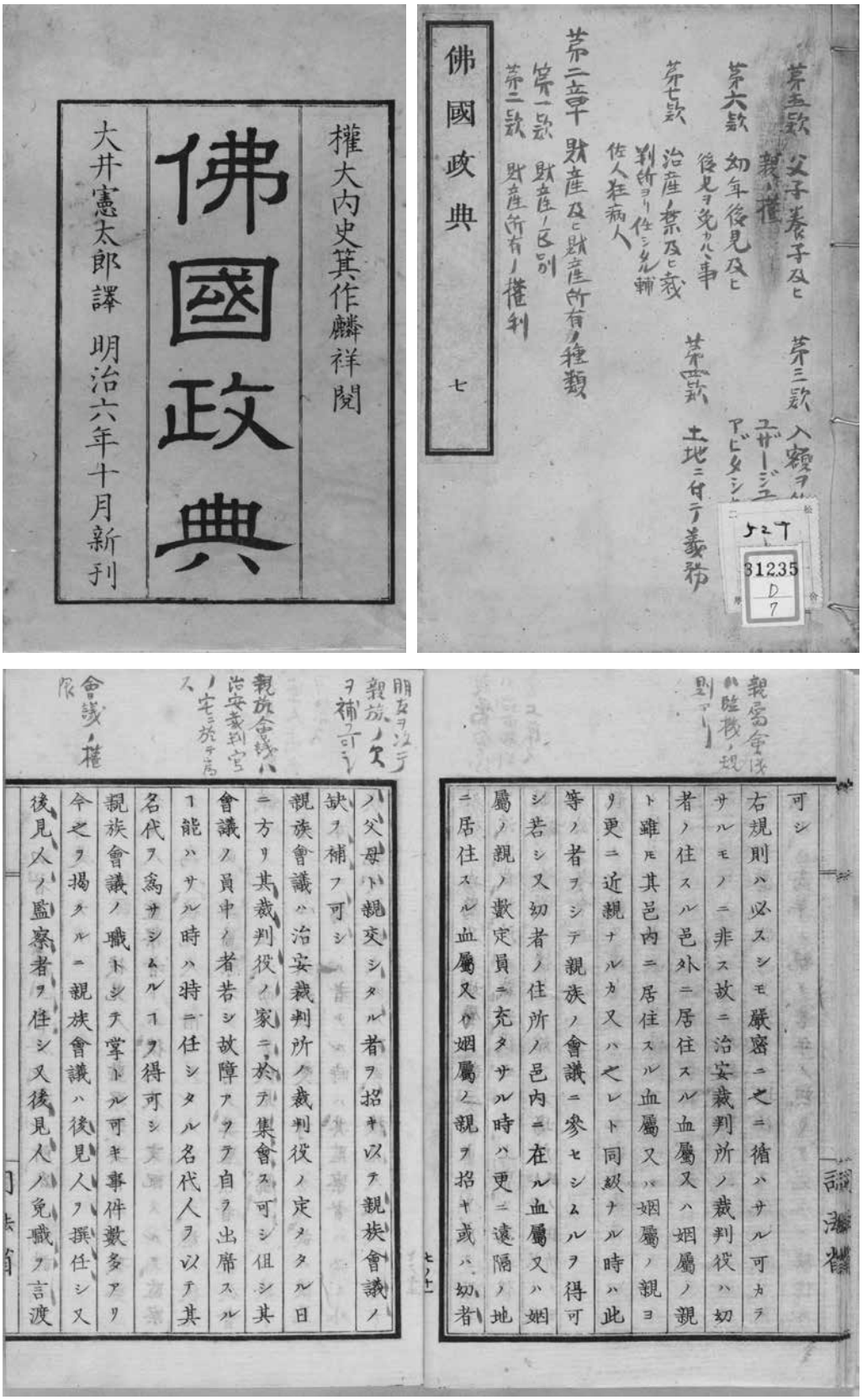
「論究」「研究ノ方法」などの項目に三島中洲の書入れが見られ、儒教の性理学を土台とした西洋法学の摂取のありかたが窺える。アリストテレス、モンテスキュー、ルソーら西洋思想家への評価も見られる。




## 3　『改定律例』二巻

明治六年　刊本

明治三年の『新律綱領』に続いて発布された刑法典が『改定律例』。その後も布告によって修正が加えられた項目が細かく加筆されており、中には三島中洲による加筆も混じる。三島中洲が裁判官として勤務するに当たって、使用されたものと見られる。

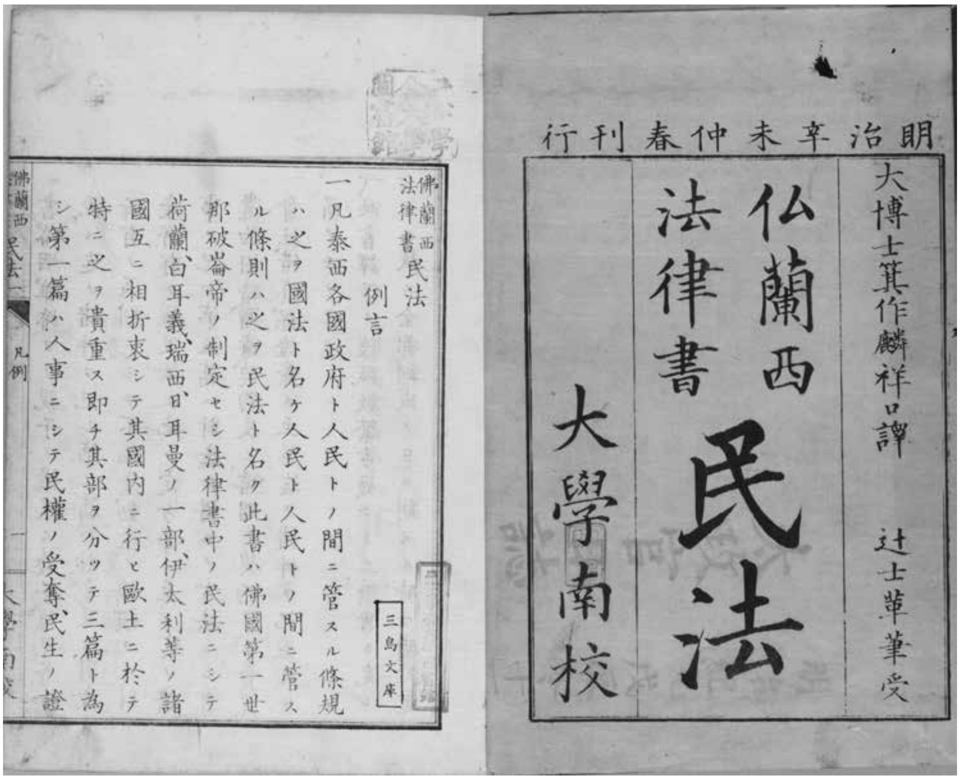



## 4 『仏国政典』十二巻

**箕作麟祥閲　明治六年　刊本**

第一部国法、第二部政法（行政官設立ノ方法・政務・行政上訴訟ノ断決）、第三部私法（人事・財産及財産所有ノ種類・財産所有ノ権ヲ得ル種々ノ方法・契約及総テ契約ヨリ生スル義務・訴訟法）、第四部刑政（刑法・治罪法）ならなる。

三島中洲が民事の裁判官であったことを反映してか、中洲の書入れは第三部私法の部分に多い。


明治辛未仲春刊行

大博士箕作麟祥口譯　辻士革筆受

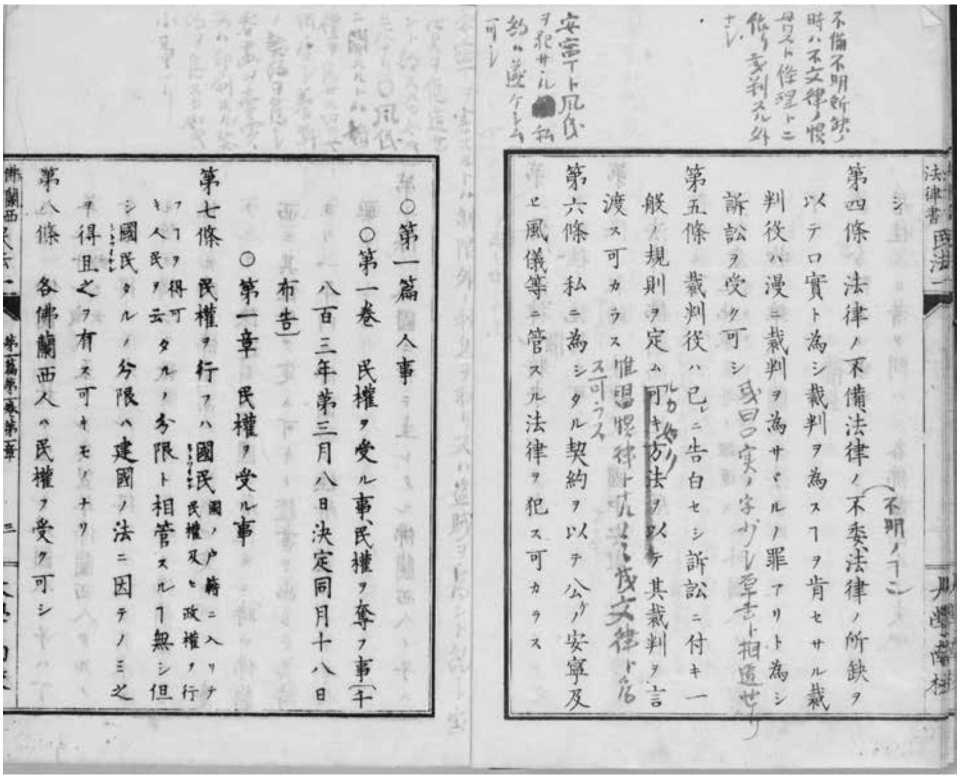
仏蘭西法律書 民法

大學南校

佛蘭西法律書民法

例言

一凡泰西各國政府ト人民トノ間ニ管スル條規ハ之ヲ國法ト名ケ人民ト人民トノ間ニ管スル條則ハ之ヲ民法ト名ク此書ハ佛國第一世那破崙帝ノ制定セシ法律書中ノ民法ニシテ荷蘭白耳義瑞西日耳曼ノ一部伊太利等ノ諸國互ニ相折衷シテ其國内ニ行ヒ歐土ニ於テ特ニ之ヲ貴重ス即チ其部ヲ分ツテ三篇ト為シ第一篇ハ人事ニシテ民權ノ受奪民生ノ證


佛蘭西法律書民法

第四條　法律ノ不備法律ノ不委法律ノ所鉄ヲ以テ口實ト為シ裁判ヲ為ス事ヲ肯セサル裁判役ハ漫ニ裁判ヲ為サヽルノ罪アリト為シ訴訟ヲ受ク可シ

第五條　裁判役ハ己レニ告白セシ訴訟ニ付キ一般ノ規則ヲ定ム可キ方法ヲ以テ其裁判ヲ言渡ス可カラス

第六條　私ニ為シタル契約ヲ以テ公ケノ安寧及ヒ風儀等ニ管スル法律ヲ犯ス可カラス

第一篇　人事

第一巻　民權ノ受ル事民權ノ奪フ事

八百三年第三月八日決定同月十八日布告

第一章　民權ノ受ル事

第七條　民權ヲ行フハ國民タルノ分限ト相管スル事無シ

第八條　各佛蘭西人ハ民權ヲ受ク可シ

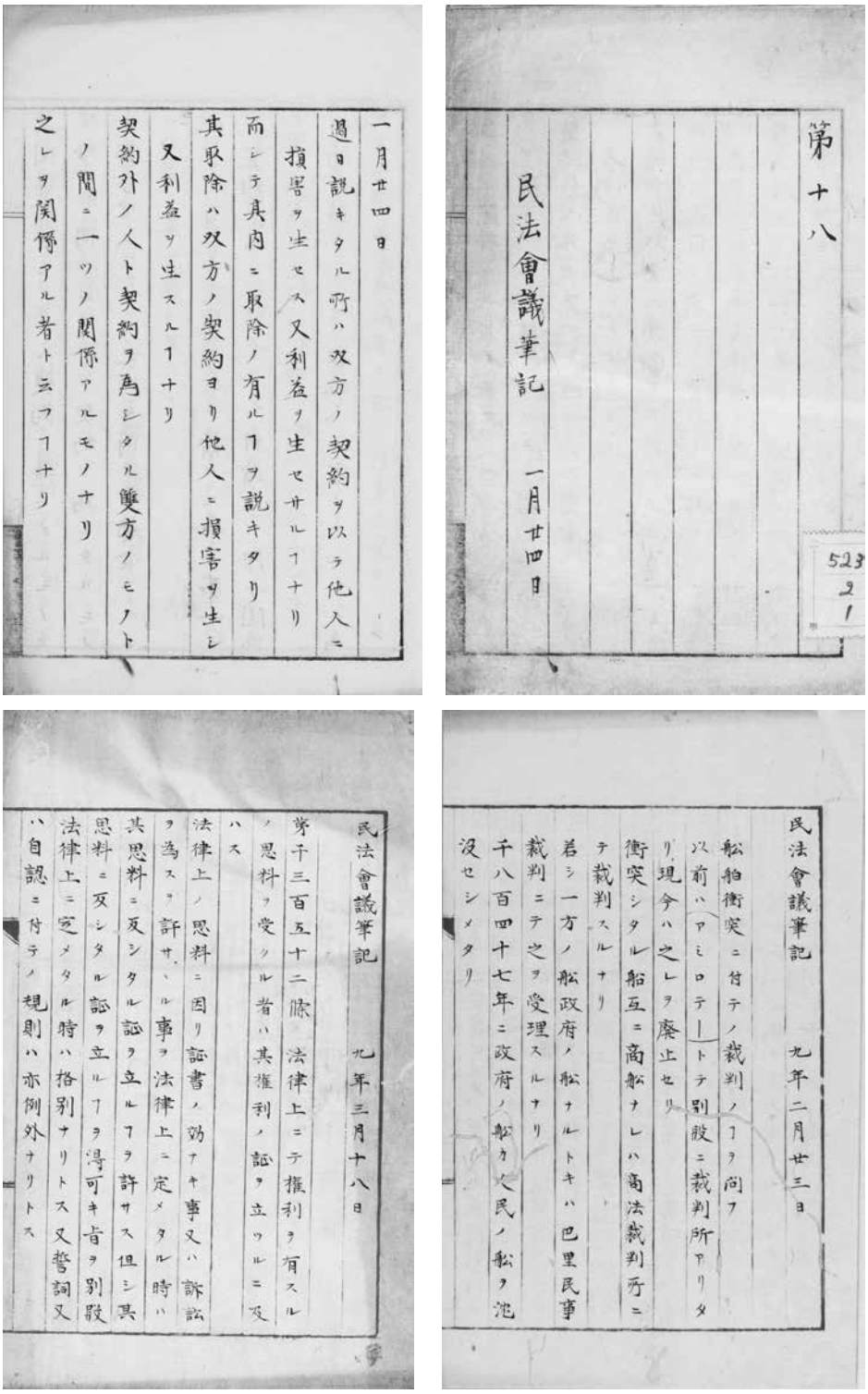
## 5 『仏蘭西法律書 民法』十六巻

**箕作麟祥訳　明治三年大学南校・文部省刊本**

本書は箕作麟祥（1846 ～ 1897）が翻訳したフランス法典のうちの民法で、全 2281 条からなる（内容細目は次頁参照）。本書には大量の三島中洲の書入れが残っているが、特に「第三篇財産所有ノ権ヲ得ル種々ノ方法」の巻二「生存中ノ遺贈ノ証書及ヒ遺嘱ノ贈遺ノ証書」（893 ～ 1100 条）、巻三「契約及ヒ総テ契約ヨリ生スル義務」（1101 ～ 1369 条）、巻四「契約ナクシテ生スル義務」（1370 ～ 1386 条）、巻五「婚姻ノ契約書及ヒ夫婦双方ノ権」（1387 ～ 1581 条）の部分に多くの書入れが見られる。

# 『仏蘭西法律書　民法』の目次


前加篇　　1～6条
第一篇　人事
　第一巻　　7～　33条　民権ヲ受クル事、民権ヲ奪フ事
　第二巻　　34～　101条　民生ノ証書
　第三巻　　102～　111条　住所
　第四巻　　112～　143条　失踪
　第五巻　　144～　228条　婚姻ノ事
　第六巻　　229～　311条　離婚
　第七巻　　312～　342条　父タル事及ヒ子タル事
　第八巻　　343～　370条　養子ノ事及ヒ「チュテール ヲヒシュズ」
　第九巻　　371～　387条　親ノ権
　第十巻　　388～　487条　初年ノ事、後見ノ事、後見ヲ免ル丶事
　第十一巻　488～　515条　丁年ノ事、治産ノ禁ノ事、裁判所ヨリ任スル補佐人ノ事
第二篇　財産及財産所有ノ種類
　第一巻　　516～　543条　財産ノ区別
　第二巻　　544～　577条　所有ノ権
　第三巻　　578～　636条　入額ノ所得ト為スノ権、「ユザーシュ」ノ権、「アビタシヲン」ノ権
　第四巻　　637～　710条　土地ノ義務
第三篇　財産所有ヲ得ル種々ノ法方
　総規則　　711～　717条
　第一巻　　718～　892条　遺物相続
　第二巻　　893～1100条　生存中ノ贈遺及ヒ遺嘱ノ贈遺ノ証書
　第三巻　　1101～1369条　契約及ヒ総テ契約ヨリ生スル義務
　第四巻　　1370～1386条　契約ナクシテ生スル義務
　第五巻　　1387～1581条　婚姻ノ契約書及ヒ夫婦双方ノ権
　第六巻　　1582～1701条　売買ノ事
　第七巻　　1702～1707条　交換ノ事
　第八巻　　1708～1831条　賃貸ノ契約
　第九巻　　1832～1873条　会社ノ契約
　第十巻　　1874～1914条　貸借
　第十一巻　1915～1963条　附託ノ事及ヒ双方相争フ物ヲ人ニ附託スル事
　第十二巻　1964～1983条　偶生ノ事ニ管スル契約
　第十三巻　1984～2010条　名代ノ証書
　第十四巻　2011～2043条　保証
　第十五巻　2044～2058条　和解
　第十六巻　2059～2070条　禁錮
　第十七巻　2071～2091条　質物ノ事
　第十八巻　2092～2203条　「プリウィレージ」及ヒ「イポテーク」ノ権
　第十九巻　2204～2218条　義務ヲ得可キ者之ヲ行フ可キ者ノ不動産ヲ抵償トシテ奪フ事、及ヒ義務ヲ得可キ者ノ順序
　第二十巻　2219～2281条　「プレスクリプション」ノ権

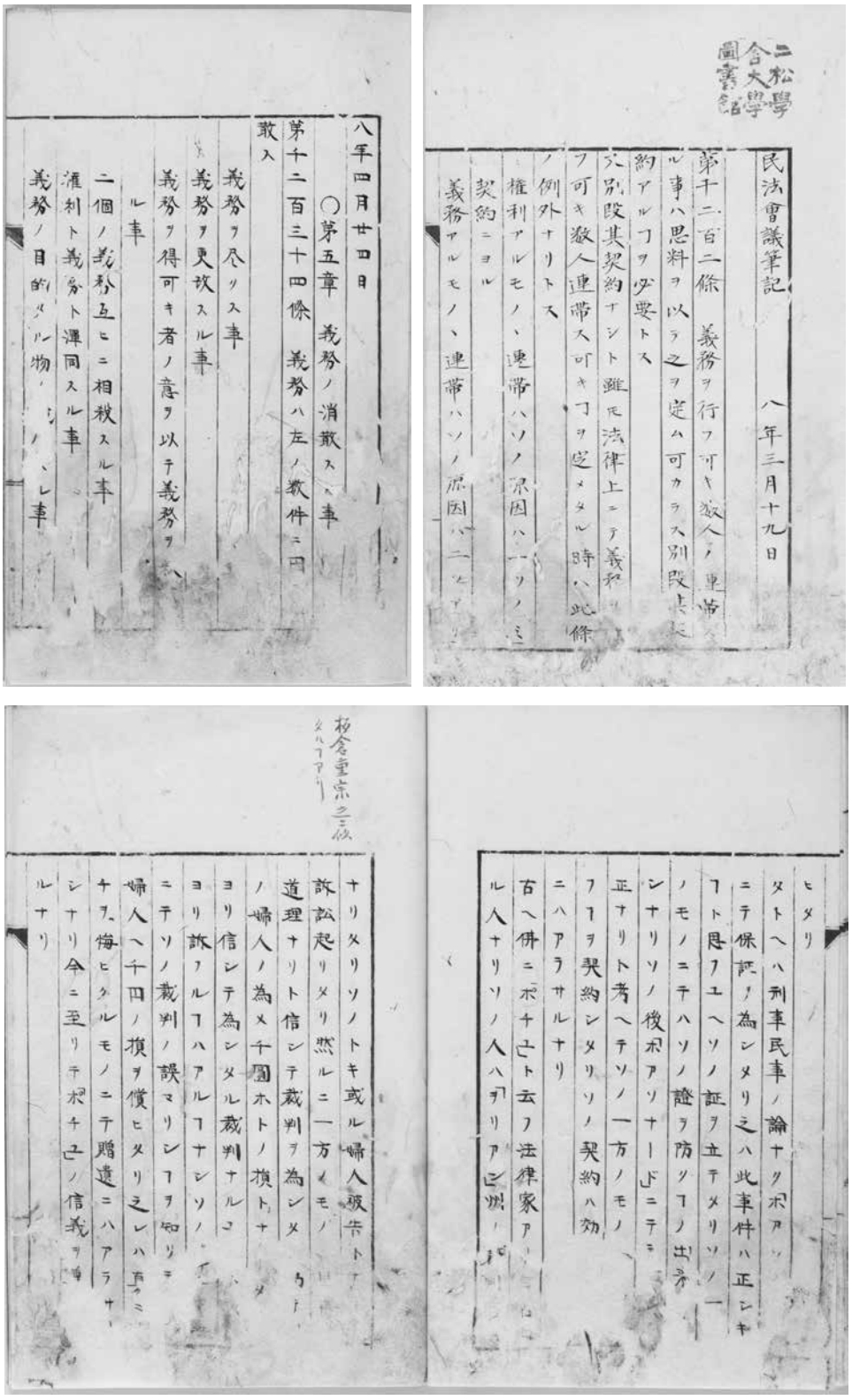



## 6　『民法会議筆記』二十四冊

明治八～九年　写本

明治三年に民法起草のために民法会議が設置され、箕作麟祥がフランス民法の翻訳に着手した。本書は司法省で行われたフランス民法の逐条解説を筆記したもので、明治八年一月から翌九年三月に行われたフランス民法「第三篇　財産所有ヲ得ル種々ノ法方」の「第三巻　契約及ヒ総テ契約ヨリ生スル義務」の条文の 1165 条から 1353 条までの解説。本文は三島中洲自身の筆記ではなく、三島による書入れもほとんど見られない。

解説においてしばしば例えを引いて解説している場合があり、ボアソナード、鶴田皓、名村泰蔵らの名を出していることから、彼らが講義者であったことが分かる。多久出身の鶴田皓（1836 ～ 1888、号斗南）は、玉乃世履と共に、三島中洲の幕末以来の旧知で、中洲の司法省出仕を推薦した人物の一人である。

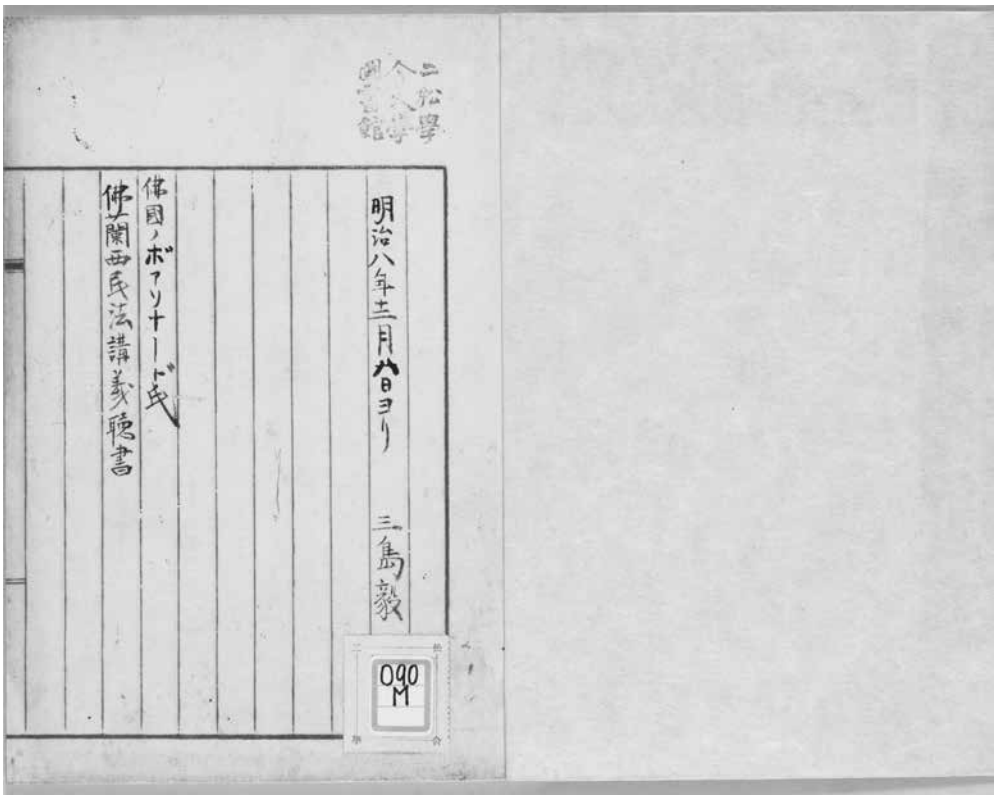


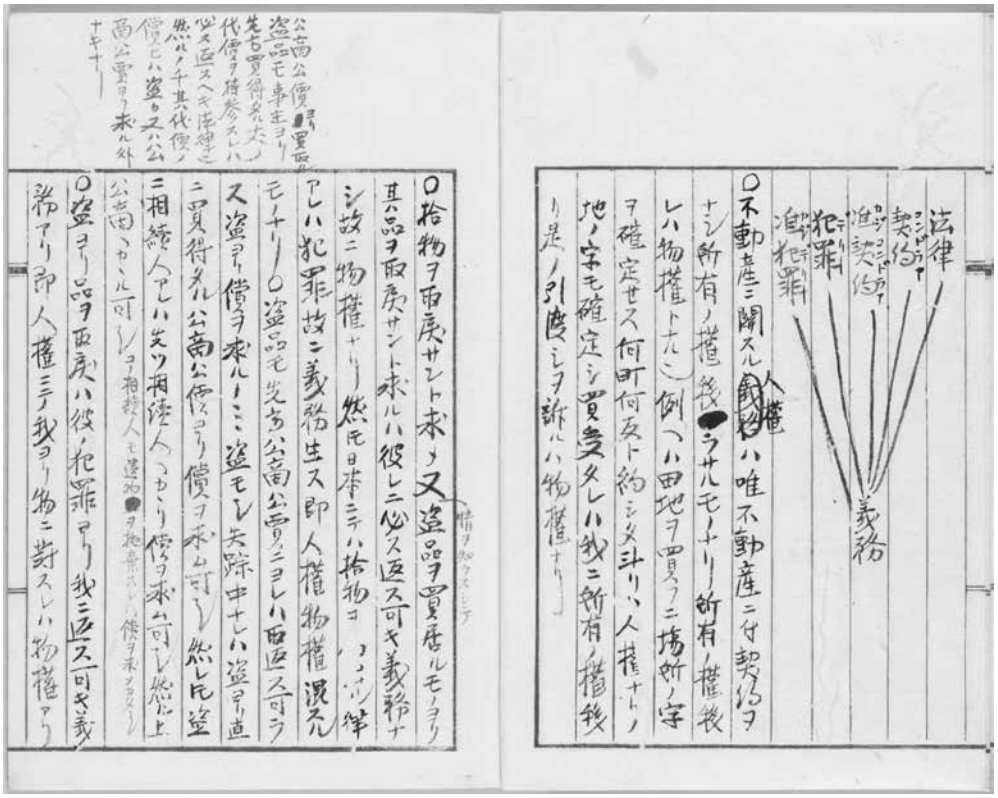
## 7 『民法会議筆記』一冊

明治八年三月・四月　写本

本書は、明治八年に司法省で行われたフランス民法の逐条解説を筆記したもので、「第三篇　財産所有ヲ得ル種々ノ法方」、「第三巻　契約及ヒ総テ契約ヨリ生スル義務」の条文の解説。三月十九日に1202～1207条・同四月二十四日に1234～1235条の解説が行われた。解説の後に質疑応答が行われていたことも分かり、民法摂取の具体的な状況が知られる。

本文は三島中洲の筆跡ではないが、三島中洲による朱筆書入れが認められるので、三島自身が出席した民法会議の時の記録と考えられる。

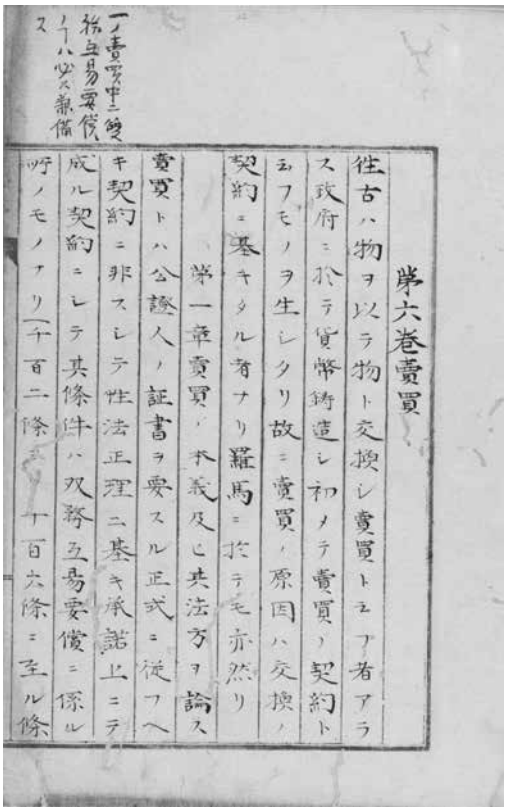


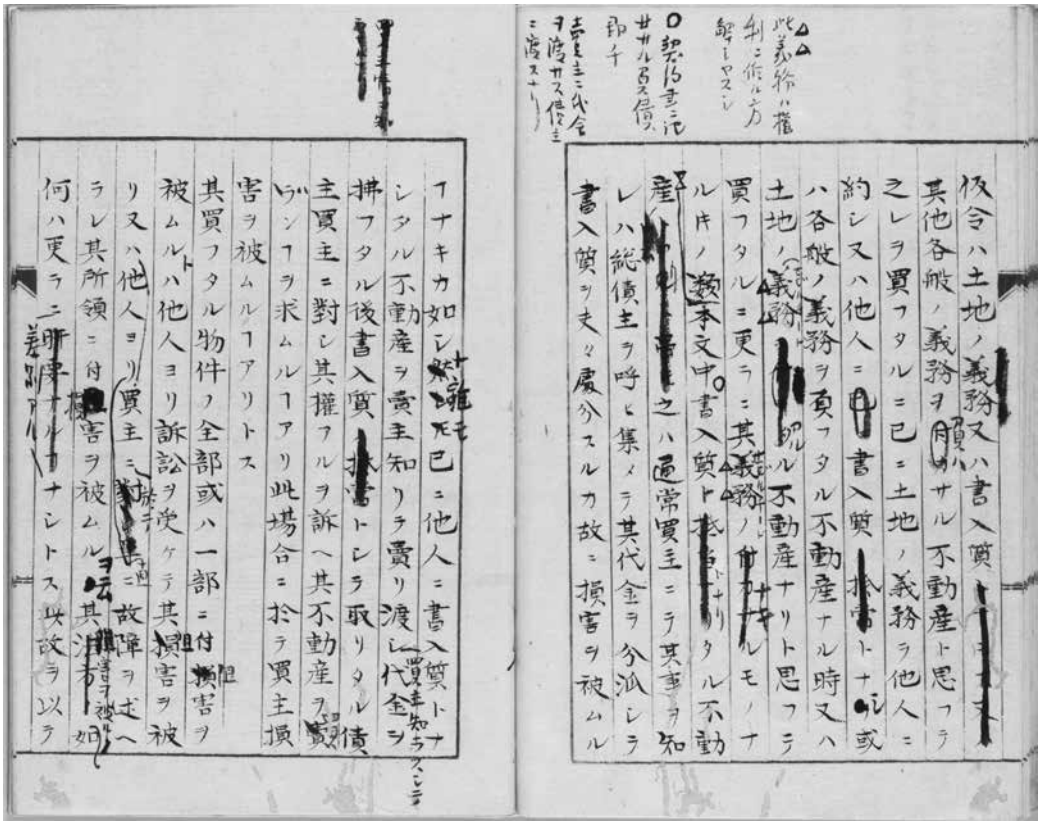




## 8　『（仏国ノボアソナード氏）仏蘭西民法講義聴書』一冊

明治八年十二月～同九年一月　写本

明治八～九年に司法省で行われたボアソナード（1825 ～ 1910　Gustave Émile Boissonade de Fontarabie）によるフランス民法の逐条解説を三島中洲自身が筆記したもの。「第三篇　財産所有ヲ得ル種々ノ法方」の「第三巻　契約及ヒ総テ契約ヨリ生スル義務」のうち、十二月八日に 1294 条、十二月二十三日に 1304 条、翌年一月十八日に 1317 条の講義を聞き書きしている。

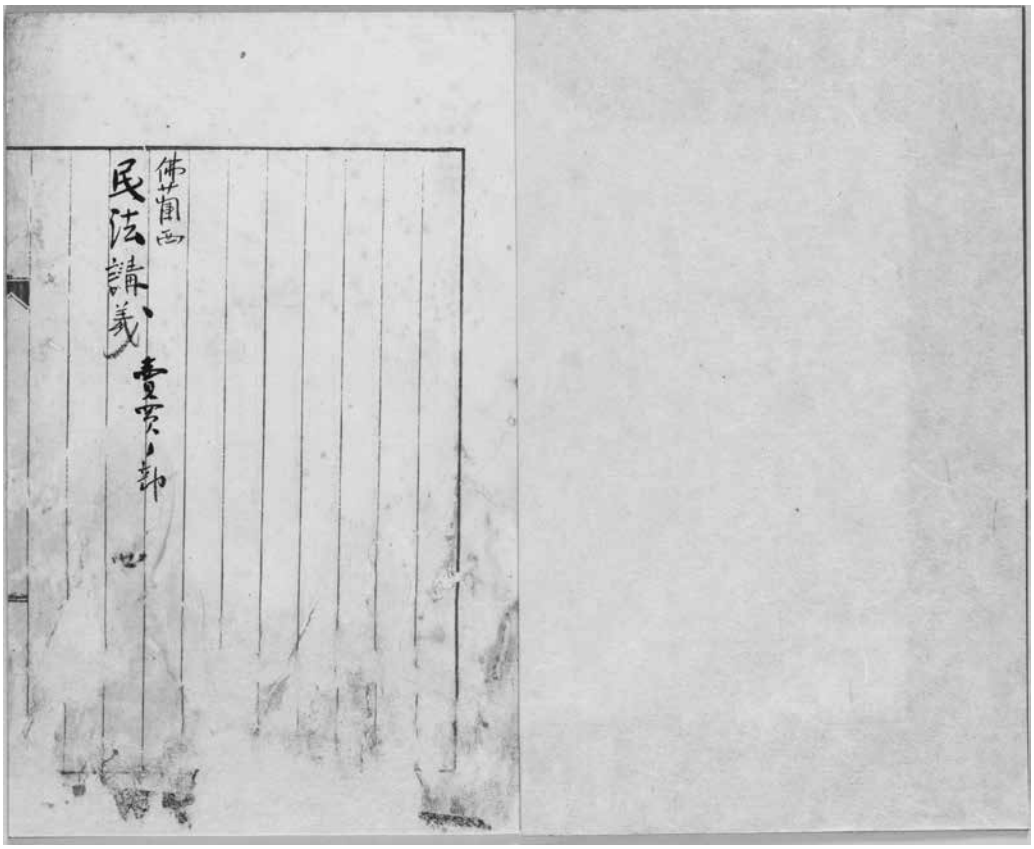


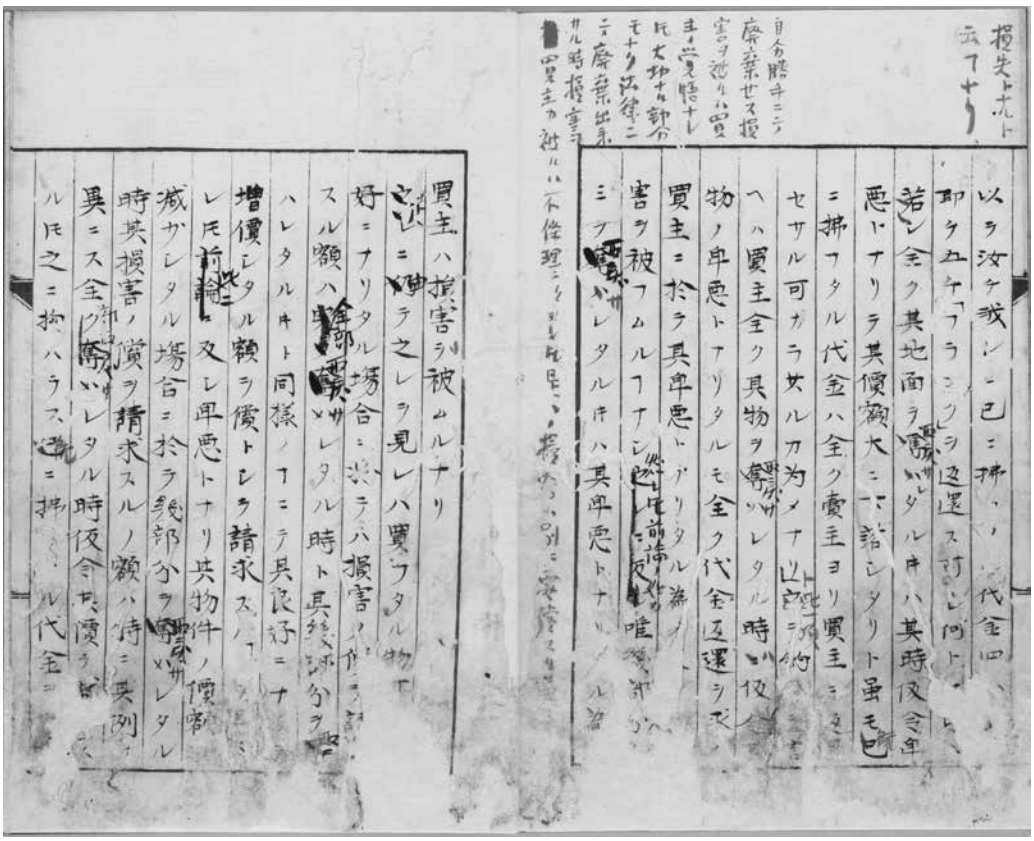


## 9 『仏蘭西民法講義 売買ノ部』三冊

明治九年頃　写本

フランス民法「第四篇　財産所有ヲ得ル種々ノ法方」の「第六巻　売買ノ事」の逐条解説の筆記。本文は三島中洲の筆跡ではないが、聴講した三島中洲による塗抹訂正や上欄書入れが大量に残る。第一冊が 1582 ～ 1599 条、第二冊が 1601 ～ 1629 条、第三冊が 1630 ～ 1640 条を収めている。

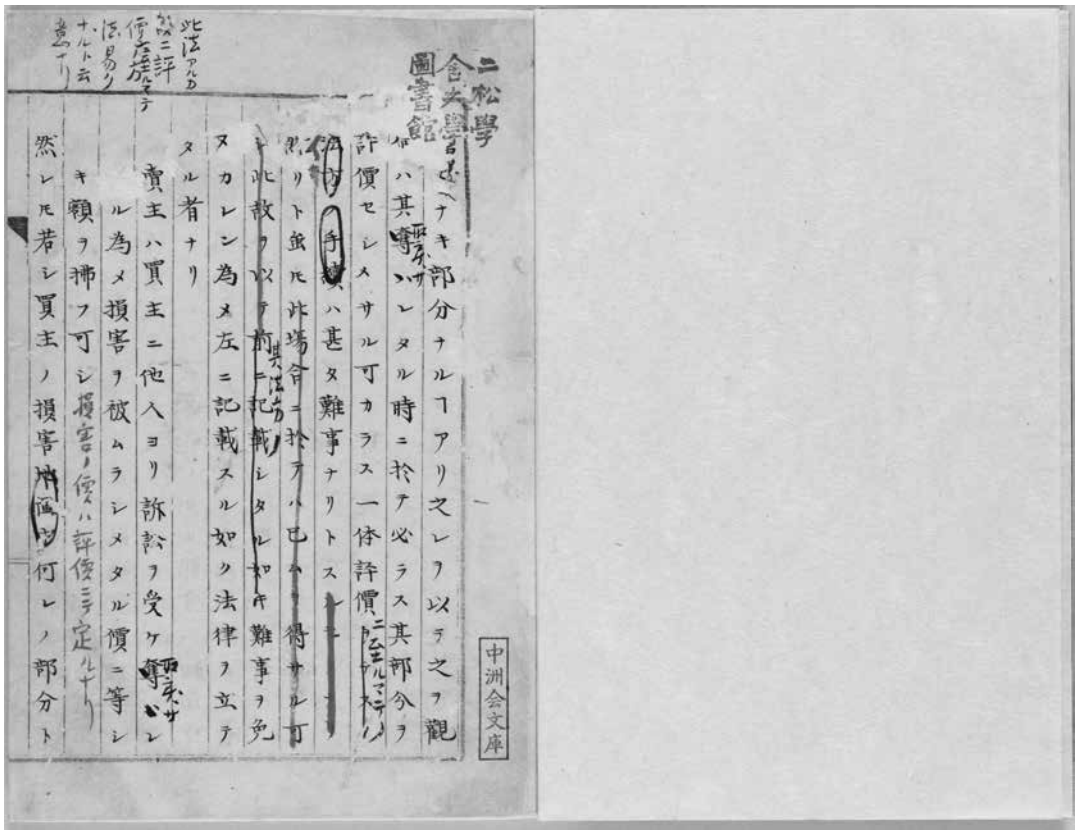


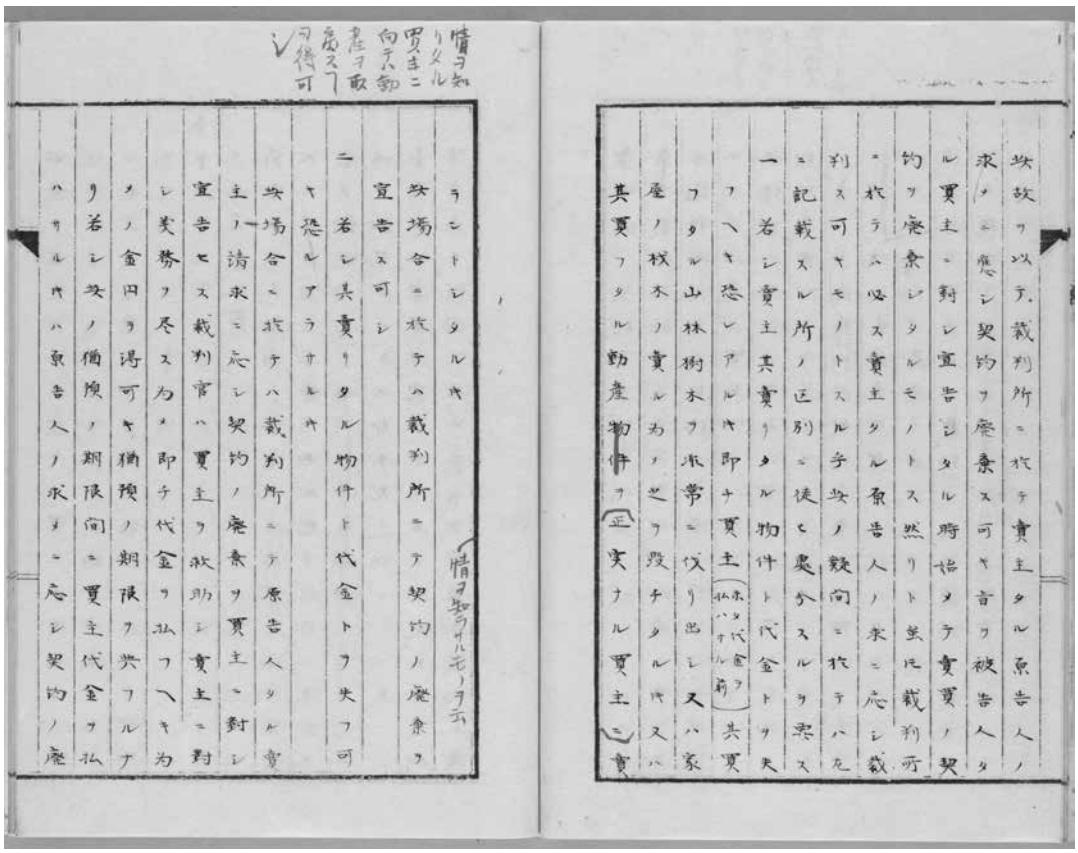



## *10*　『仏蘭西民法講義 売買ノ部』一冊

明治九年頃　写本

フランス民法「第四篇　財産所有ヲ得ル種々ノ法方」の「第六巻　売買ノ事」の逐条解説のうち、1636・1637 条の解説を収めている。本文は三島中洲の筆跡ではないが、聴講した三島中洲による塗抹訂正や上欄書入れが残る。

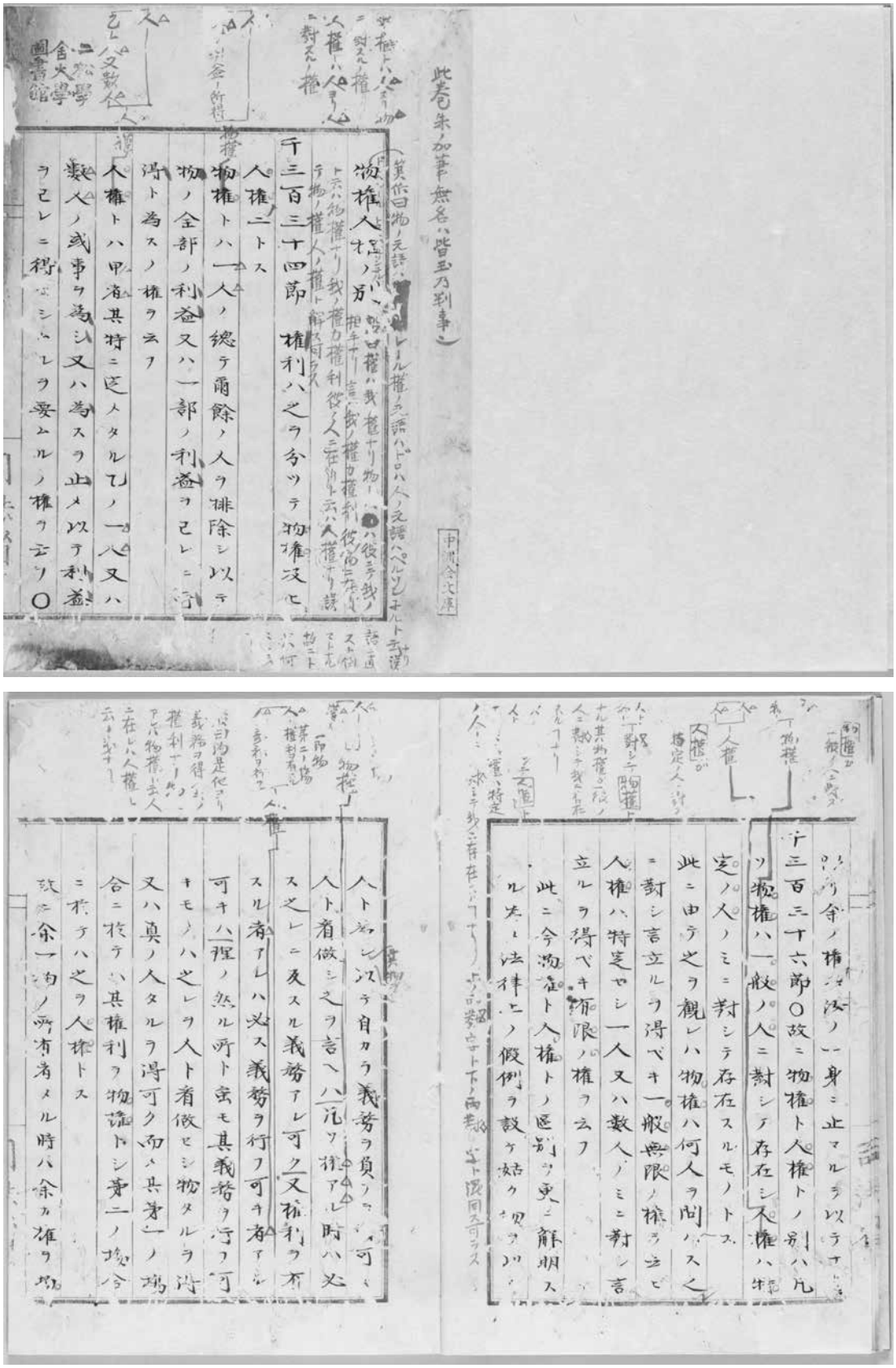


## 11 『民法』一冊

明治九年頃　写本

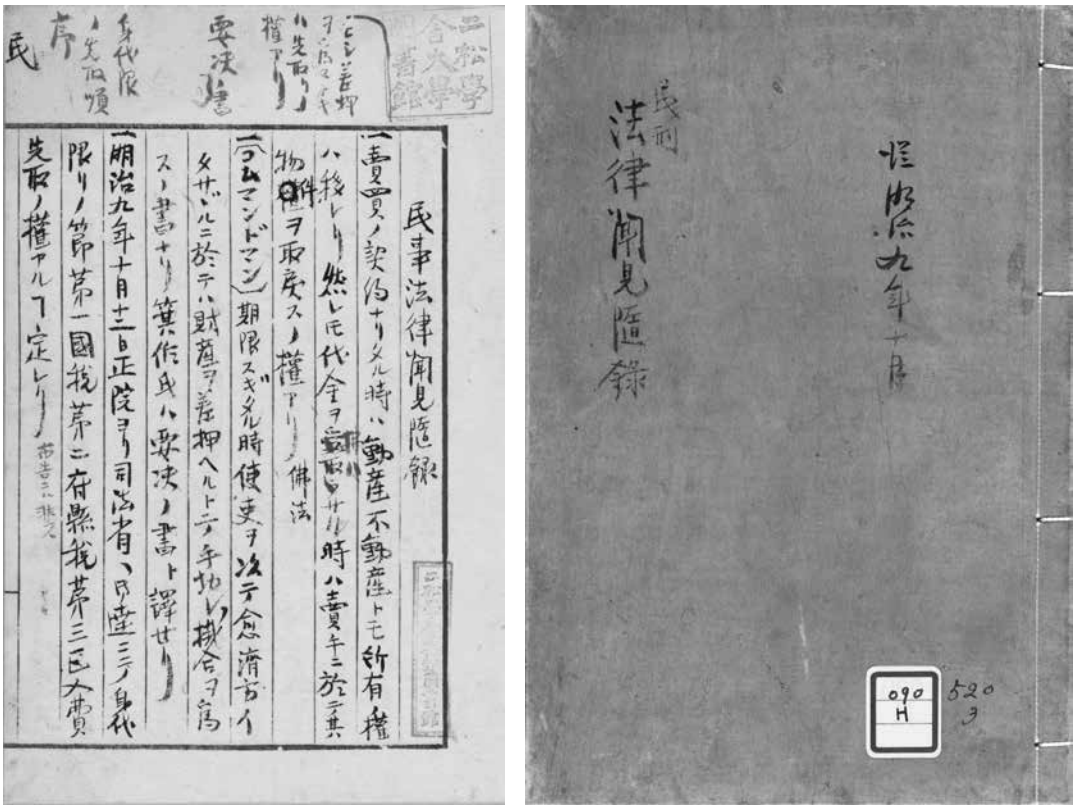
フランス民法「第四篇　財産所有ヲ得ル種々ノ法方」の「第六巻　売買ノ事」の逐条解説のうち、1637 ～ 1657 条の講義を筆記したもの。講義を聴講した三島中洲が朱筆で書入れをしている。

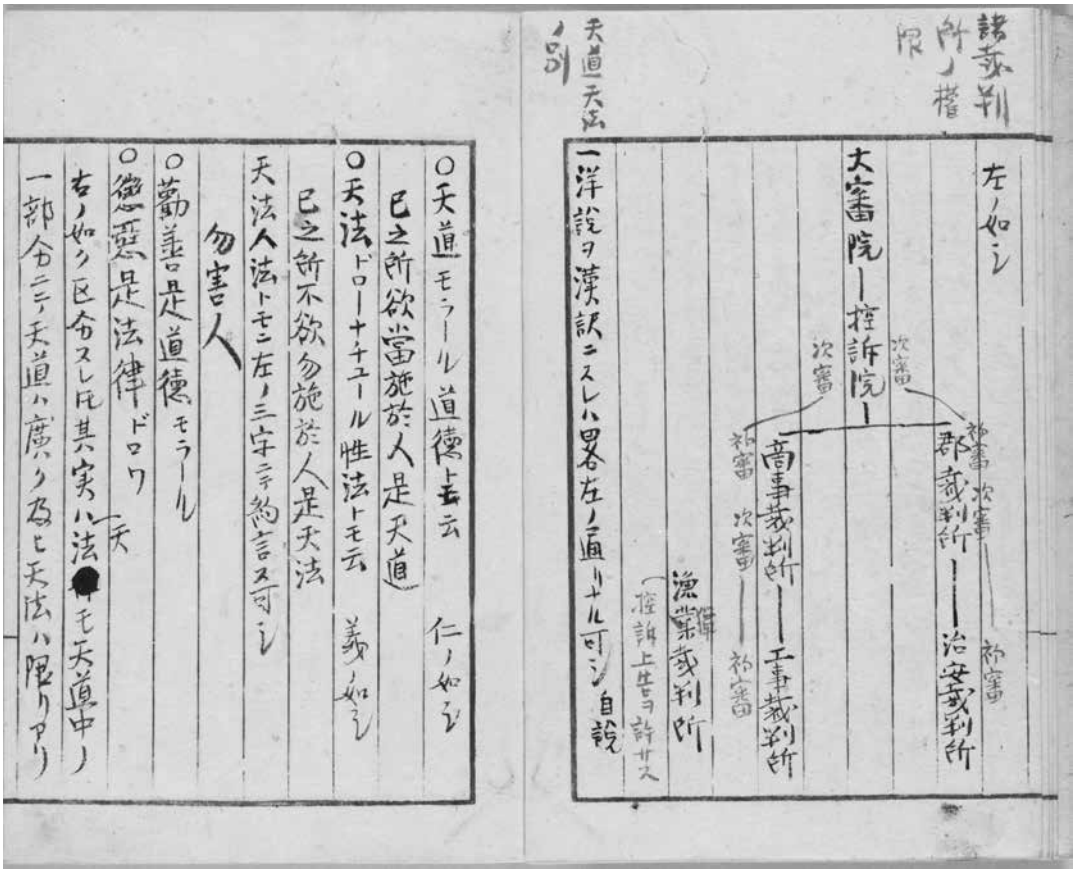


## 12　『物権人権ノ別』一冊

明治初期　写本

巻頭に「此巻末朱ノ加筆無名ハ皆玉乃判事也」とあり、玉乃世履（1825 ～ 1886、号五龍）の書入れが含まれていることが分かる。また「箕作曰」と箕作麟祥の言が引用され、「毅曰」と三島中洲自身のコメントも書き込まれている。

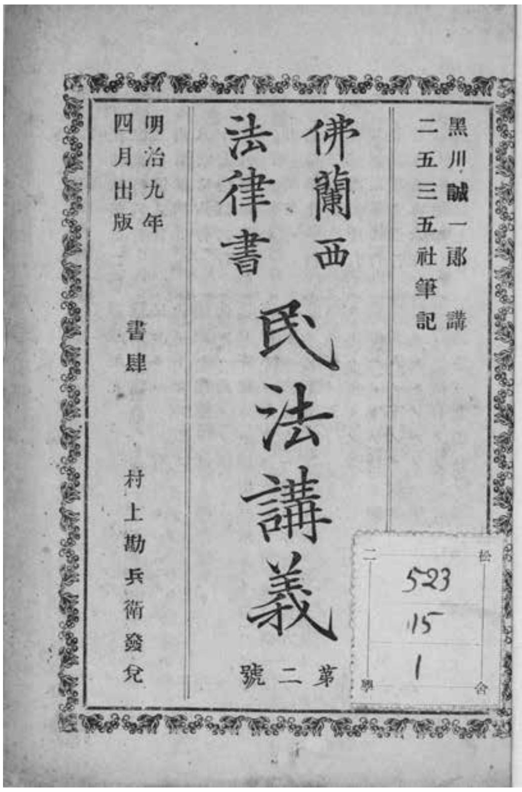


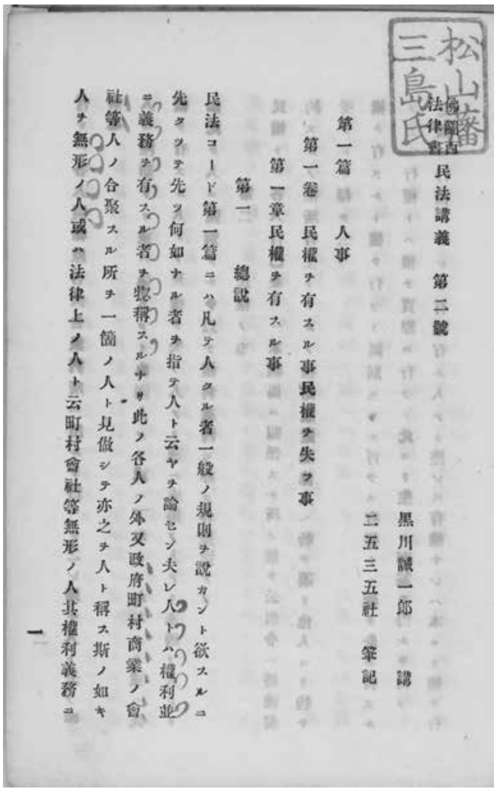

## 13 『民刑法律聞見随録』一冊

明治九年十月　写本

ボアソナードらからフランス民法・刑法を学んだ三島中洲が、明治九年十月に残した民法・刑法に関する手記。法律の具体的な条文についての言及ではなく、裁判所制度、西洋法学と東洋思想に関する包括的な見解などが見られる。



黒川誠一郎講
二五三五社筆記
佛蘭西
法律書 民法講義
明治九年
四月出版
書肆　村上勘兵衛發兌
第二號



佛蘭西法律書 民法講義　第二號　黒川誠一郎　講
二五三五社　筆記

第一篇　人事

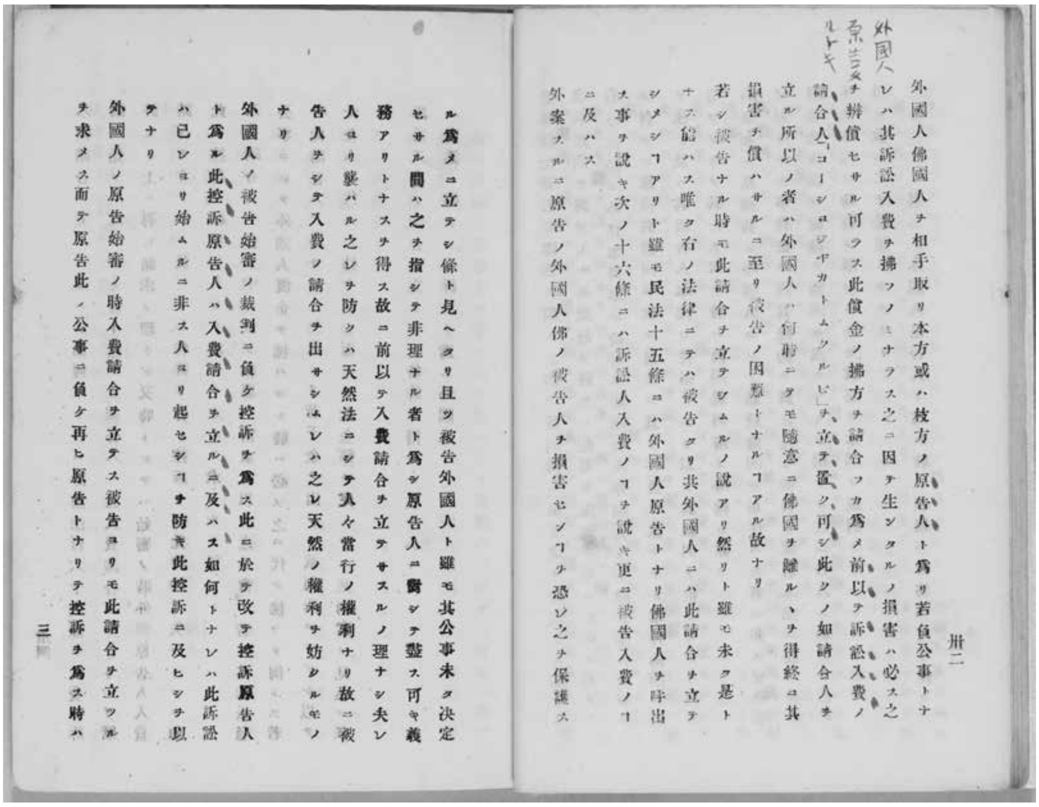
第一卷　民權ヲ有スル事民權ヲ失フ事

第一章　民權ヲ有スル事

第一　總說

民法コード第一篇ニハ凡テ人タル者一般ノ規則ヲ說カント欲スルニ先タツテ先ツ何如ナル者ヲ指テ人ト云ヤヲ論セン夫レ人トハ權利並ニ義務ヲ有スル者ヲ總稱スルナリ此ノ各人ノ外又政府町村商業ノ會社等人ノ合聚スル所ヲ一箇ノ人ト見做シテ亦之ヲ人ト稱ス斯ノ如キ人ヲ無形ノ人或ハ法律上ノ人ト云町村會社等無形ノ人其權利義務ニ

一



外國人佛國人ヲ相手取リ本方或ハ枝方ノ原告人ト爲リ若偶公事トナレハ其訴訟入費ヲ拂フノミナラス之ニ因テ生シタルノ損害ハ必ス之ヲ辨償セサル可ラス此償金ノ拂方ヲ請合フカ爲メ前以テ訴訟入費ノ請合人「コーシヨジユヂカトユムソルビ」ヲ立テ置ク可シ此クノ如請合人ヲ立ル所以ノ者ハ外國人ハ何時ニタモ隨意ニ佛國ヲ離ルヽヲ得終ニ其損害ヲ償ハサルニ至リ被告ノ困難トナルヿアル故ナリ

若シ被告ナル時モ此請合ヲ立テシムルノ說アリ然リト雖モ未タ是トナス能ハス唯タ右ノ法律ニテハ被告タリ共外國人ニハ此請合ヲ立テシメシヿアリト雖モ民法十五條ニハ外國人原告トナリ佛國人ヲ呼出ス事ヲ說キ次ノ十六條ニハ訴訟人入費ノヿヲ說キ更ニ被告人入費ノヿニ及ハス

外案スルニ原告ノ外國人佛ノ被告人ヲ損害セシヿヲ恐レ之ヲ保護ス

廿二

ル爲メニ立テシ條ト見ヘタリ且ツ被告外國人ト雖モ其公事未タ決定セサル間ハ之ヲ指シテ非理ナル者ト爲シ原告人ニ對シテ盤ス可キ義務アリトナスヲ得ス故ニ前以テ入費請合ヲ立テサスルノ理ナシ夫レ人ヨリ襲ハルヽ之レヲ防クハ天然法ニシテ人々當行ノ權利ナリ故ニ被告人ヲシテ入費ノ請合ヲ出サシムレハ之レ天然ノ權利ヲ妨クルモノナリ

外國人ノ被告始審ノ裁判ニ負ケ控訴ヲ爲ス此ニ於テ改テ控訴原告人ト爲ル此控訴原告人ハ入費請合ヲ立ルニ及ハス如何トナレハ此訴訟ハ已レヨリ始ムルニ非ス人ヨリ起セシヿヲ防キ此控訴ニ及ヒシヲ以テナリ

外國人ノ原告始審ノ時入費請合ヲ立テス被告ヨリモ此請合ヲ立ツルヲ求メス而テ原告此ノ公事ニ負ケ再ヒ原告トナリテ控訴ヲ爲ス時ハ

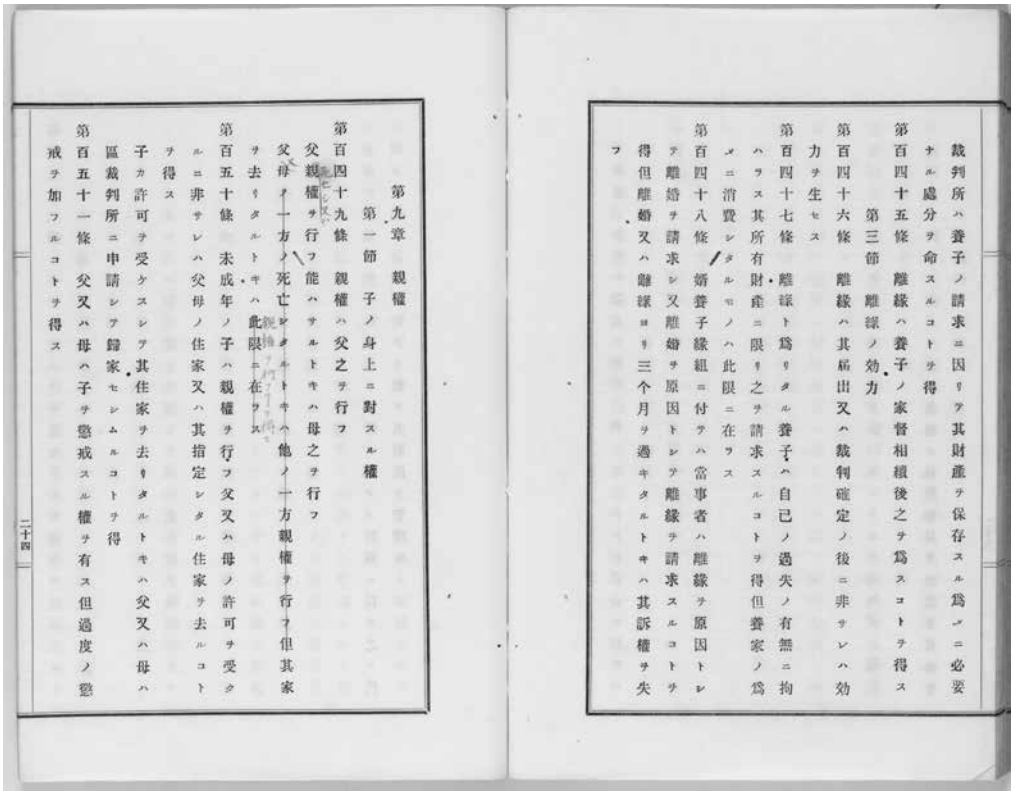
三

## *14*　『仏蘭西法律書 民法講義』一冊

**黒川誠一郎講　二五三五社筆記**

**明治九年黒川誠一郎活字印本**

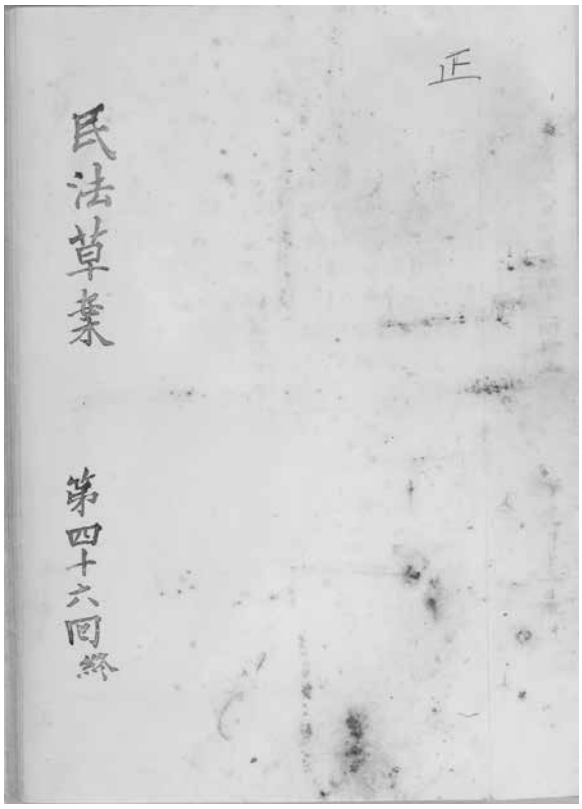
黒川誠一郎が刊行した「フランス民法」で、三島中洲の書入れが残る。黒川誠一郎は幕末加賀藩の蘭方医黒川良安（1817～1890）の男。金沢に設立された英仏学塾道済館で学び、藩から欧州に派遣された。箕作麟祥らと並ぶ明治初期の法曹として知られる。

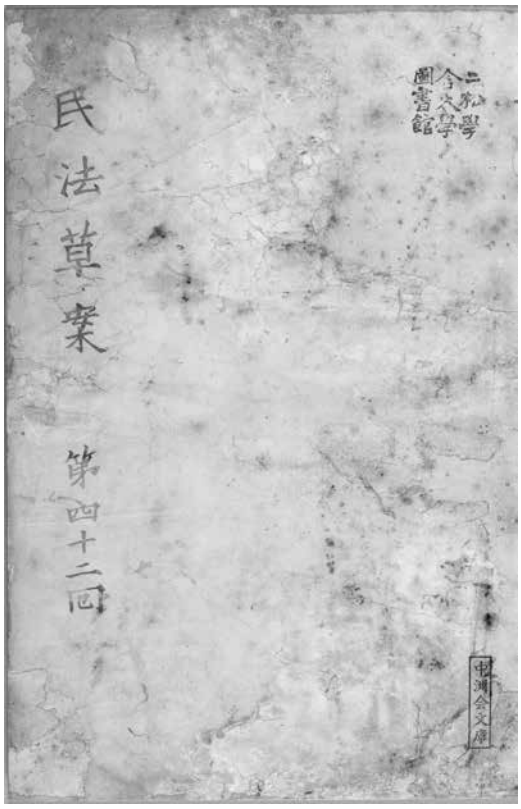



## 15 『法令・民法財産取得編・民法人事編』一冊

明治二十三年　活字印本

明治二十三年十月七日に公布された旧民法の一部である。当初明治二十六年一月一日から施行されるはずであったが、いわゆる民法典論争が収まらず、第二次伊藤内閣において施行延期となり（明治二十五年十一月）、そのまま施行されることなく廃止された。

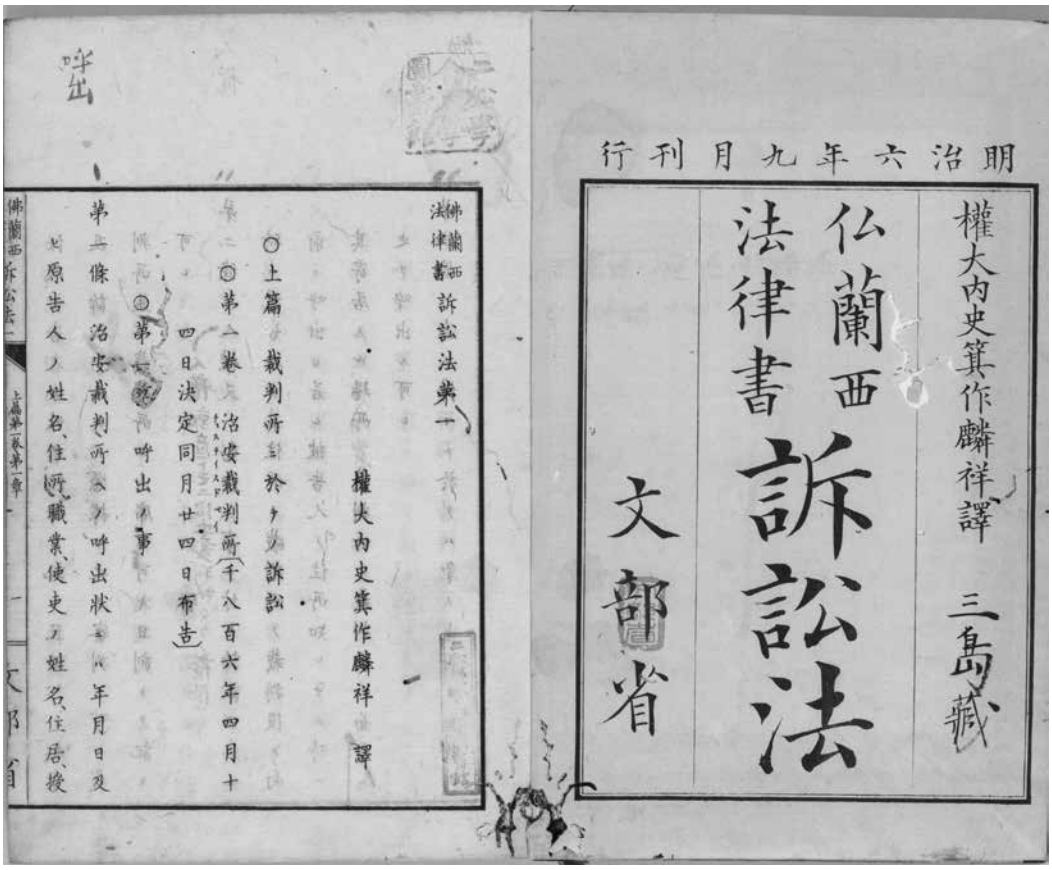


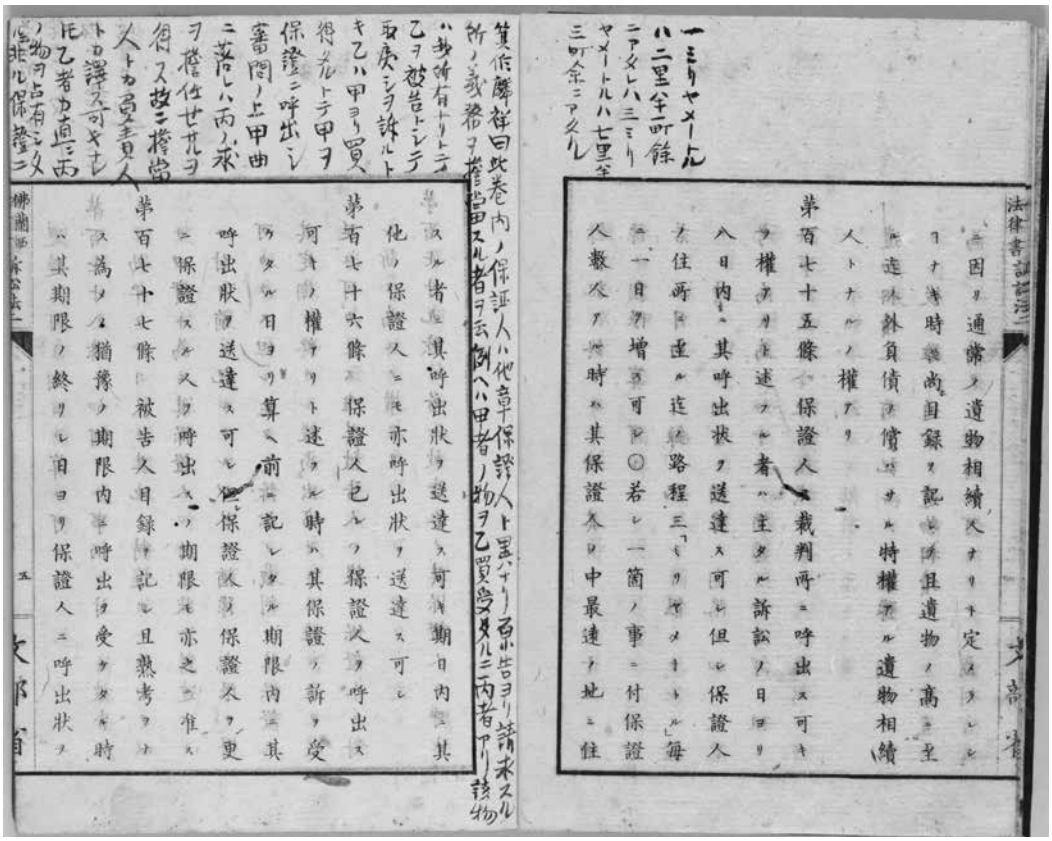



## *16*　『民法草案』合一冊

明治二十一～二十三年頃　青焼印本

『民法草案』の修正段階で作成された青焼印刷に、加筆修正が施されている。民法草案 1315 ～ 1496 条が収められている。

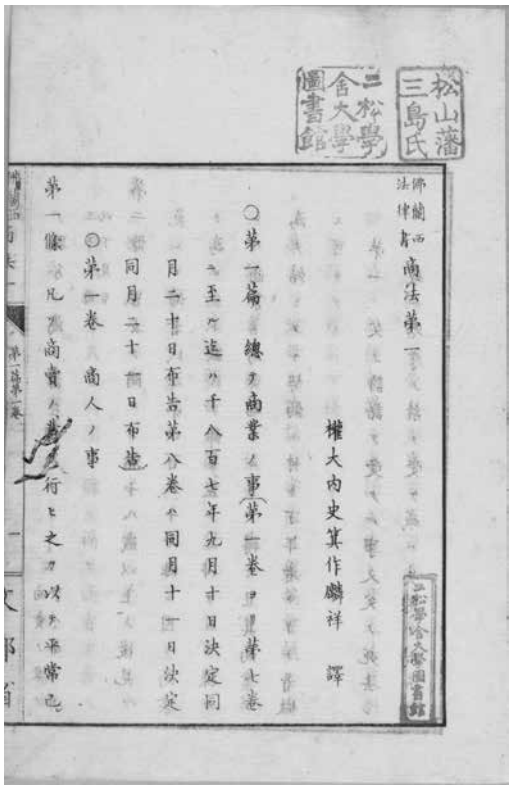


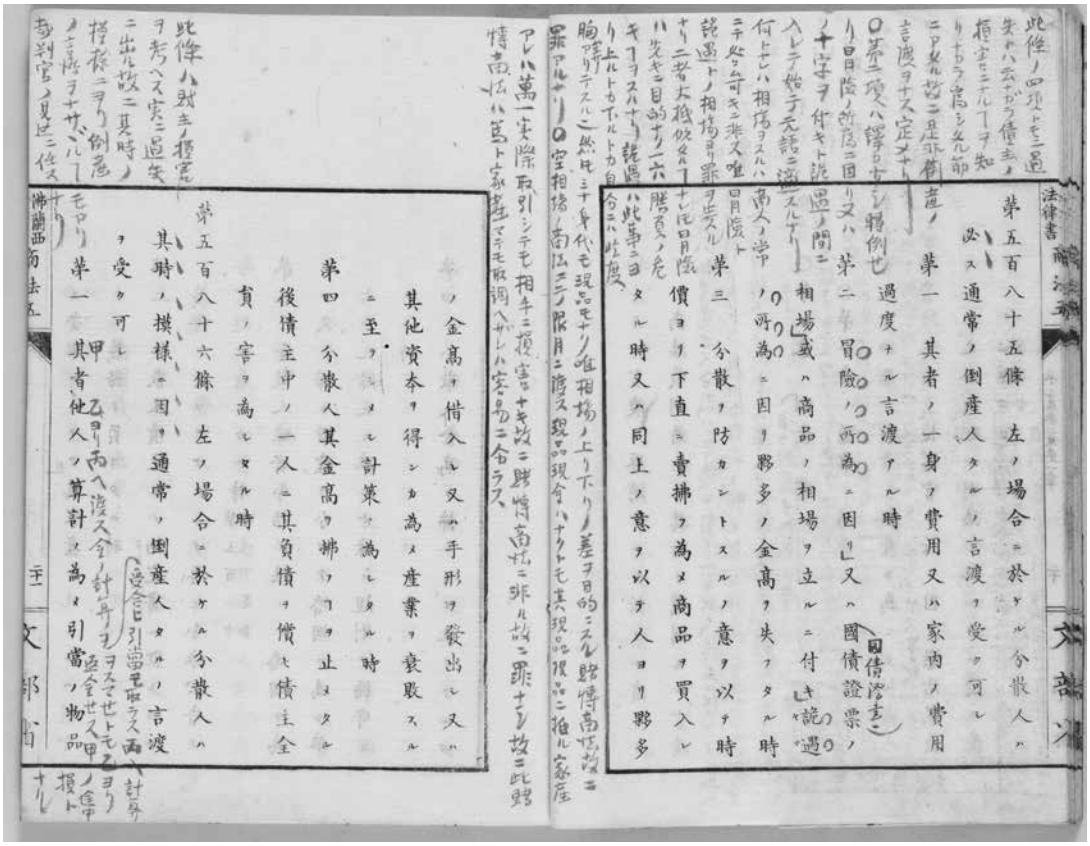




## 17 『仏蘭西法律書 訴訟法』八冊

箕作麟祥訳　明治六年　刊本

三島中洲による朱墨の書入れがほぼ全編に散見し、ボアソナードや箕作麟祥の意見もしばしば引用されている。

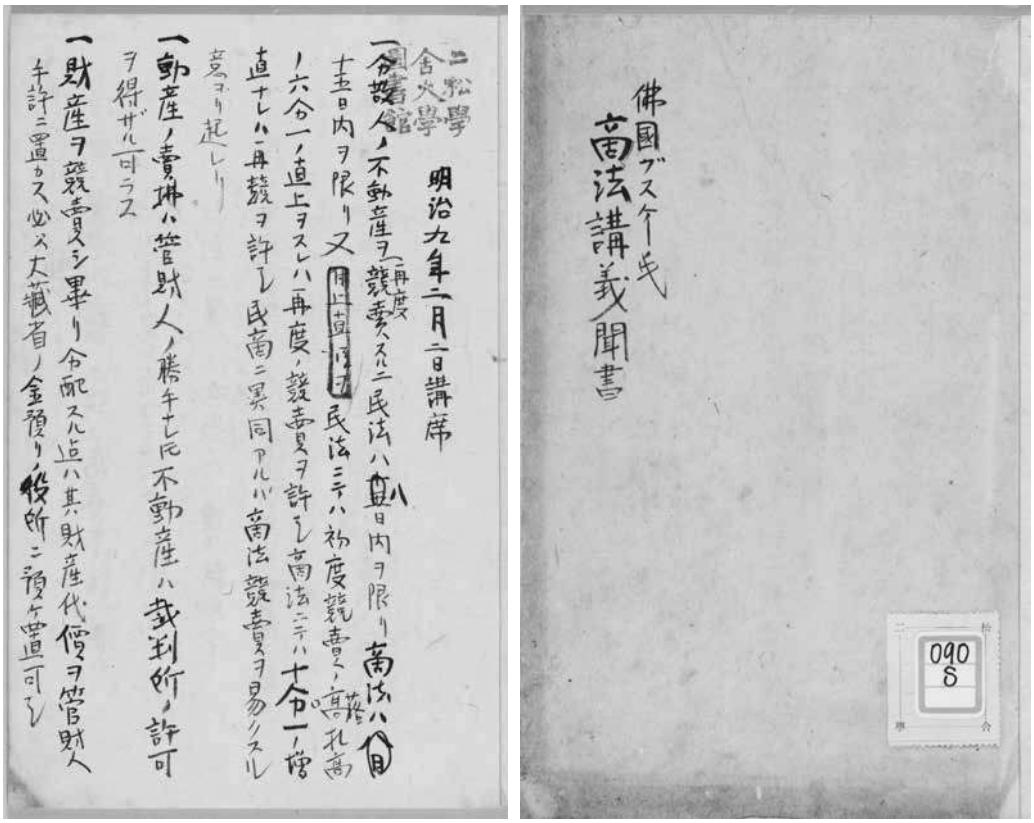





## *18*　『仏蘭西法律書　商法』五冊

箕作麟祥訳　明治七年　刊本

三島中洲の書入れが見られる箇所は限定的で、第四冊・第五冊の「第三篇　家資分散ノ事及ヒ通常ノ倒産及ヒ詐欺ノ倒産ノ事」に集中している。次に掲げる１９『仏国ブスケー氏商法講義聞書』の内容と重なることから、本書の書入れはブスケによる明治九年の講義と関連すると考えられる。



佛國ブスケ氏
商法講義聞書

二松學舍大學 図書館

明治九年二月二日講席

一令嗣人ノ不動産ヲ（再度）競売スルニ民法ハ直ハ日内ヲ限リ商法ハ百
十五日内ヲ限リ又百五十日内ヲ限ル民法ニテハ初度競売ノ高価ノ
六分一ノ直上ヲスレハ再度ノ競売ヲ許シ商法ニテハ十分一ノ増
直ナレハ再競ヲ許シ民商ニ異同アルハ商法競売ヲ易クスル
意ヨリ起レリ

一動産ノ売価ハ管財人ノ勝手ヲ以テ不動産ハ裁判所ノ許可
ヲ得ザル可カラス

一財産ヲ競売シ畢リ令配スル迄ハ其財産代価ヲ管財人
手許ニ置カス必ス大蔵省ノ金預リ役所ニ預ケ置可シ

一令配ノ次第左ノ通リ（裁判費用右ハ不動産ヲ競フトルモノ（ノ令吹ハコノ内ニアリ）

第一　管財人令嗣ノ手数ヲ高ニ付テノ諸入費

第二　總財主ノ高ニスル丁三ツ入リタル費用

第三　總財主申合セ令嗣人ニ遣ス扶助金

第四　（コノ先取リノ不動産ヲ競フトリタルモノニ非ス）先取リノ権ヲ持チタル債主ト動産ヲ管ス取リタル債主

第五　先取特権ナキ並ノ債主ノ金高ニ應シ割賦ノ事

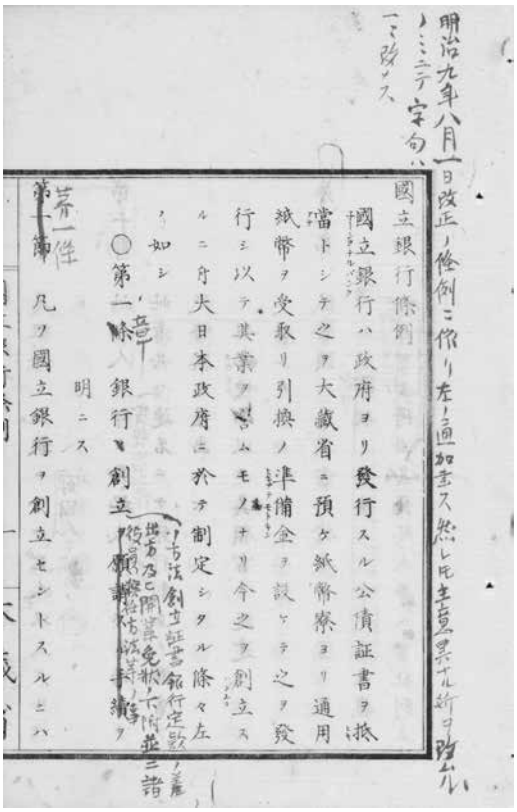
右ノ内ニモシ遠地ニ参リ居ル債主アリ令嗣公告ノ行ハレ時ハ令嗣人ヨリ債金高ヲ書出シタル計算書ニアル員数ヲケ割合金ニ除キ大蔵ノ金預リ役所ニ預ケ置債主ニ裁合可シ○此場合ニ於テ令嗣人ノ書出シニ間違ナシト保セラレス故ニ裁判官ノ見込ヲ以テ十分ノ一ヲ除計ニ除ケ置クヲ得可シ

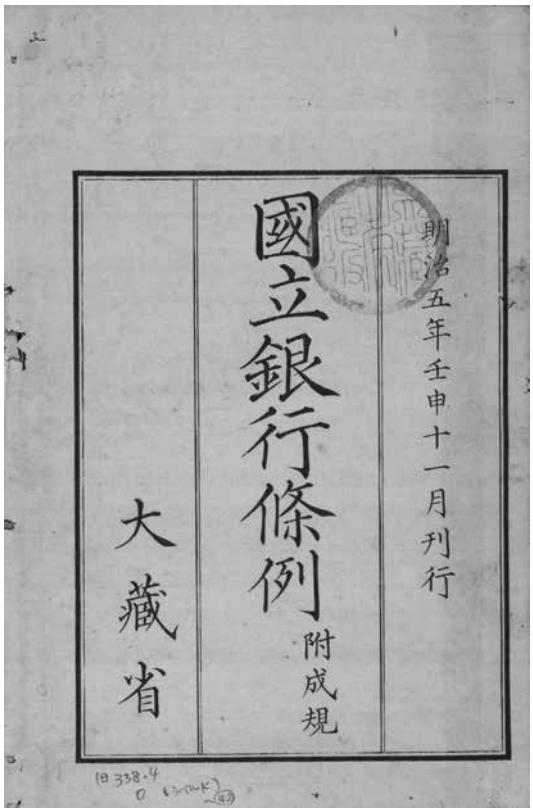
又債主ニ於テハ百円迄借ヲ求メ令嗣人ニ於テハ五十円迄借スレハ忠信ト申立原被争ヒヲ生シ吟味中ナルヲアリ然ル是レカ為ニ令嗣ヲ延ス可カラサルニ付是モ債主預高ヲケノ割合ヲ除ケ置ク可シ

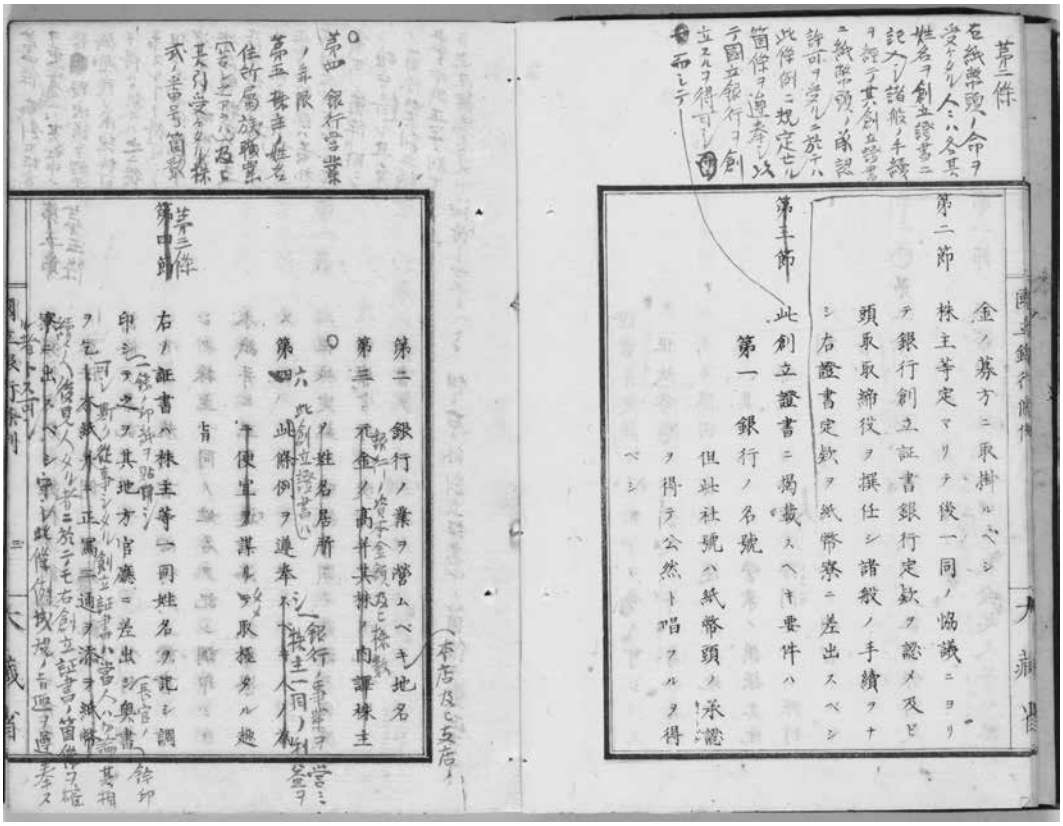
## 19 『仏国ブスケー氏商法講義聞書』一冊

明治九年二月　写本

明治九年二月二日のブスケ（1846 ～ 1937　Georges Hilaire Bousquet）によるフランス商法の講義を三島中洲自身が筆記したもの。ブスケは明治五年に来日してフランス法を講義し、明治九年に帰国した。



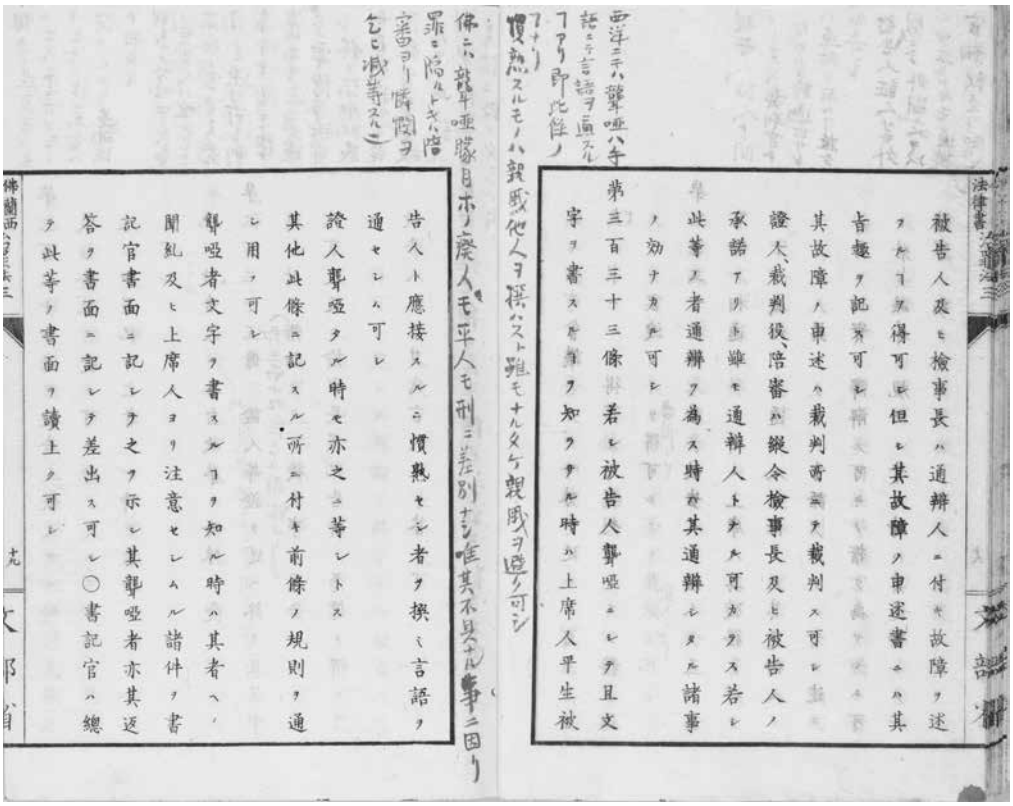


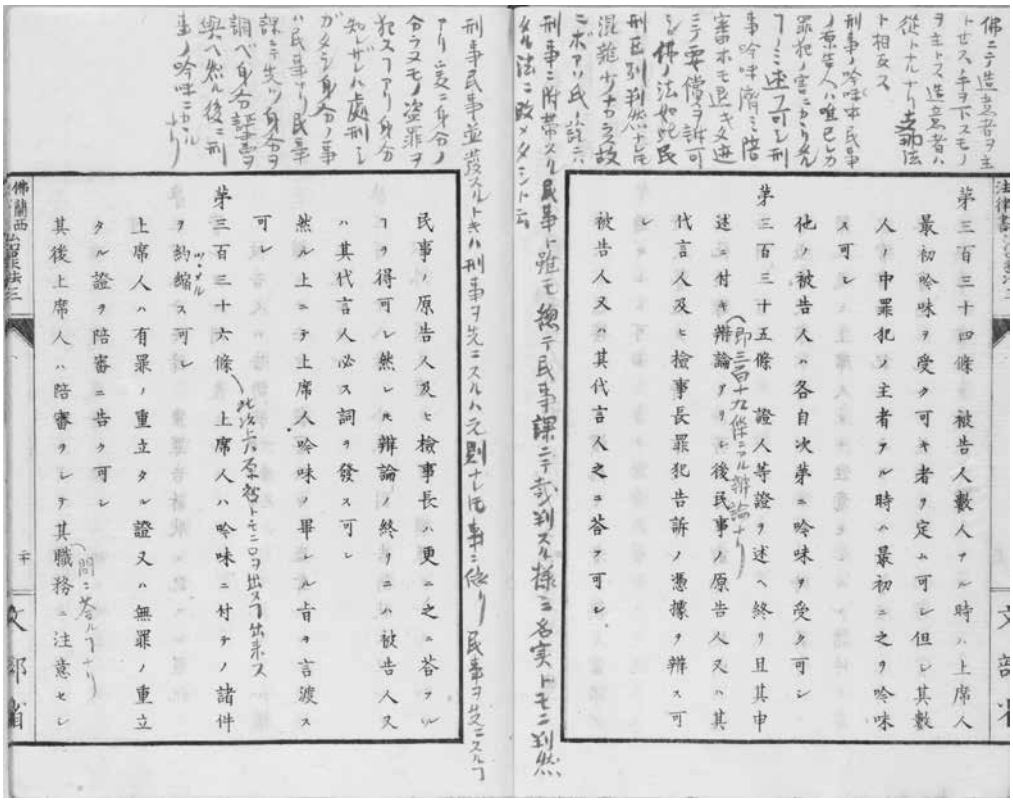



## 20 『国立銀行条例 附成規』一冊

大蔵省　明治五年　刊本

巻頭に「明治九年八月一日改正ノ条例ニ依リ左ノ通リ加筆ス。然レトモ主意異ナル所ヲ改ムルノミニテ字句ハ一々改メス。」とある通り、全篇に明治九年の条例に従った加筆修正が施されている。三島中洲は高梁藩士の秩禄公債を資本金とした第八十六国立銀行の設立に関与したので、本書の書入れはその過程で行われたものと考えられる。



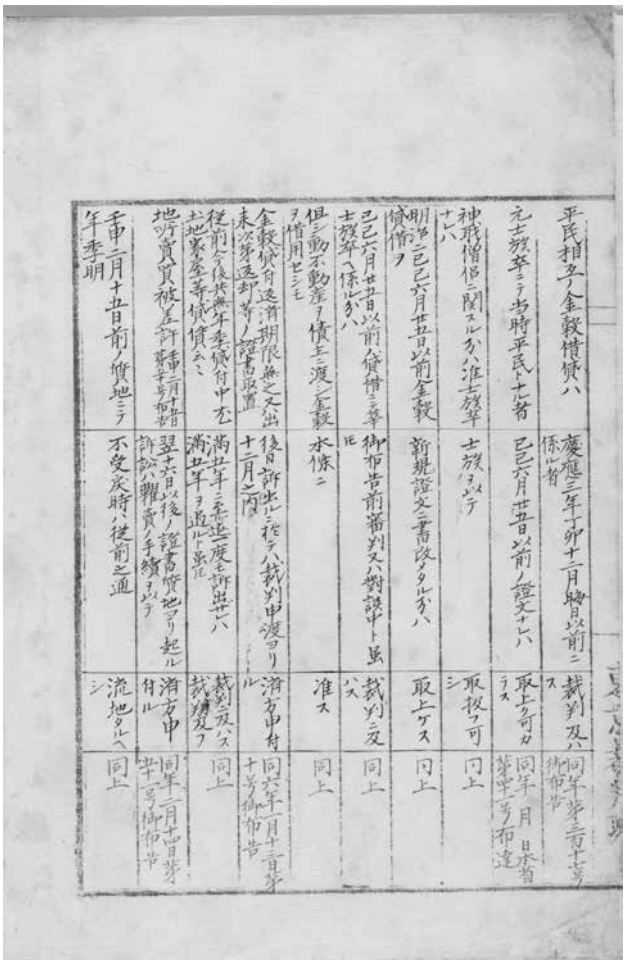


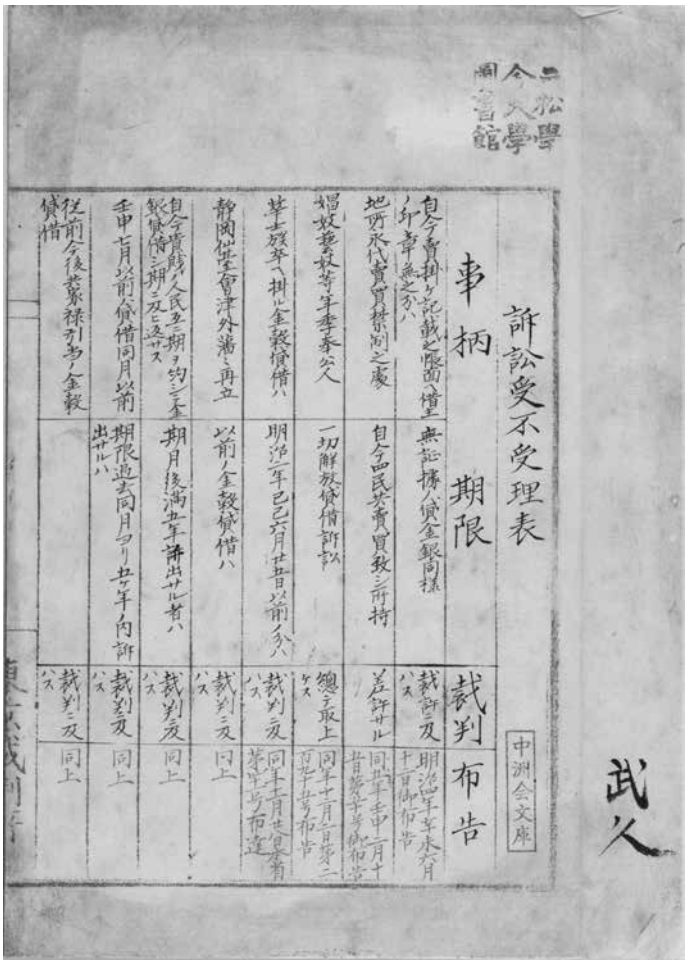
## *21*　『仏蘭西法律書　罪法』六冊

**箕作麟祥訳　明治六年　刊本**

明治初年の『新律綱領』『改定律例』の後、フランスの治罪法を参考にしながら刑事裁判が行われ、明治十三年に治罪法が制定され、更に明治二十三年に刑事訴訟法が制定されている。

箕作麟祥訳『治罪法』に書入れられた三島中洲の書入れは比較的限定されていて、「第一篇　司法警察ノ事及ヒ警察ノ職ヲ行フ官吏ノ事」、「第二篇　裁判所ノ事」のうち「第二巻陪審ニ任カス可キ事件」の箇所に集中している。



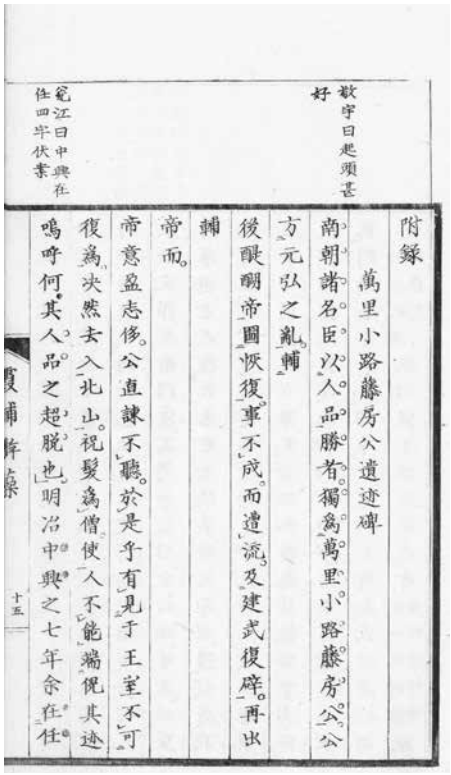


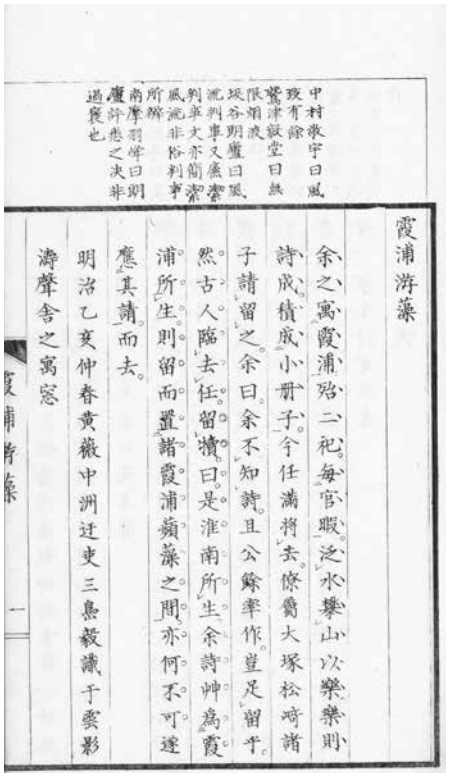

## 22　『訴訟受不受理表』一冊

明治八～九年頃　写本

明治初年に裁判所に提訴があった場合に、その時点で「裁判ニ及ハス」「総テ取上ケス」「取上ク可カラス」「取上ケス」「済方申付ル」や「差許サル」「取扱フ可シ」など、受理するか不受理にするかの基準を簡易に表示した一覧表である。「事柄」と「期限」が記され、一番下の欄に根拠となる布告が記されており、実際に裁判事務を取り扱う際に使用されたものと考えられる。柱刻に「東京裁判所」とある用箋に記されているので、三島中洲が東京裁判所の聴訟（民事裁判官）を勤めた明治八年四月から九年までの間のもの（九年二月十日大審院民事課に転任）と考えられる。

# Ⅱ（その他の資料）

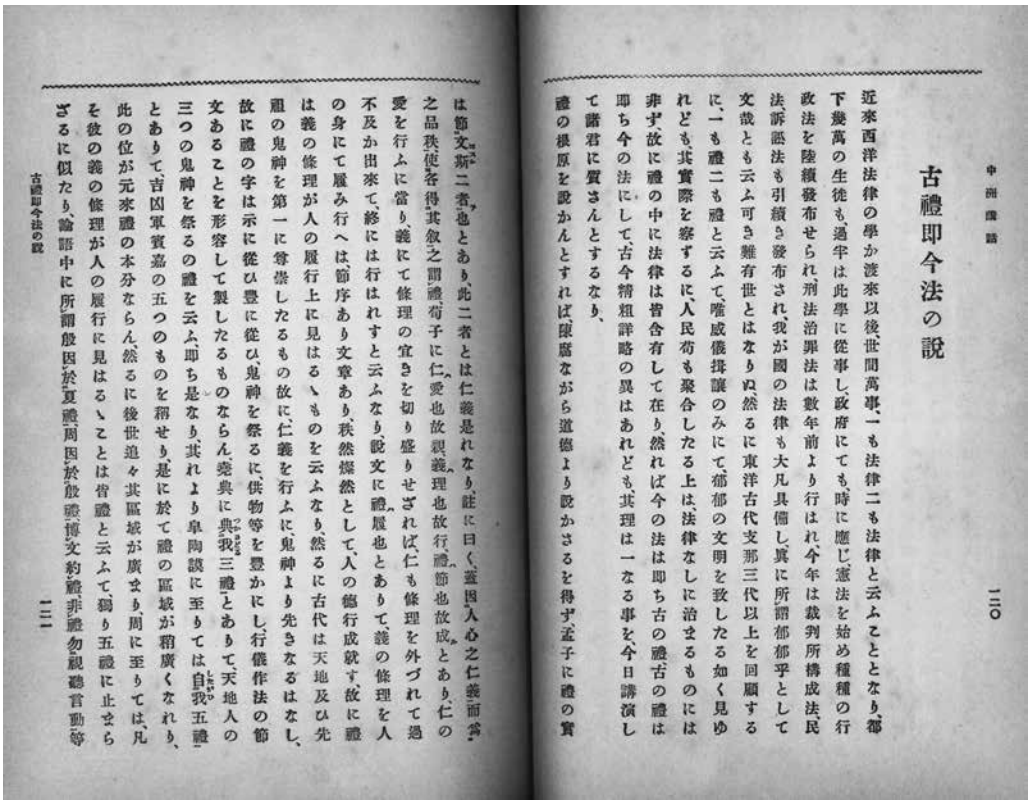




## *23* 三島中洲『霞浦游藻』一冊

明治九年　出版人森春濤　島屋平七・須原屋源助発行

三島中洲の最初の出版は、明治六年から八年までの新治裁判所所長を務めた二年間、公務の余暇に作った詩文を編纂した本書であった。明治六年八月夏季休暇中の霞ケ浦舟航に始まり、翌七年八月夏季休暇中の日光滞在を経て、八年四月の離任に至るまでの作である。附録として、この間に訪れた南朝旧跡に寄せた「万里小路藤房公遺迹碑」「小田城墟碑」「那珂公碑」も収録されている。東京に移ってから復活した旧友たちとの詩文の交流を反映して、上欄と巻末に中村敬宇・鷲津毅堂・南摩羽峰・広瀬林外・葉松石・鱸松塘・森春濤・小野湖山・川田甕江・那珂通高による批評が記されている。玉乃世履と大塚尚の序、巌谷一六題言、安田老山の題画、葉松石の題詞、松崎循の跋を附して刊行された。



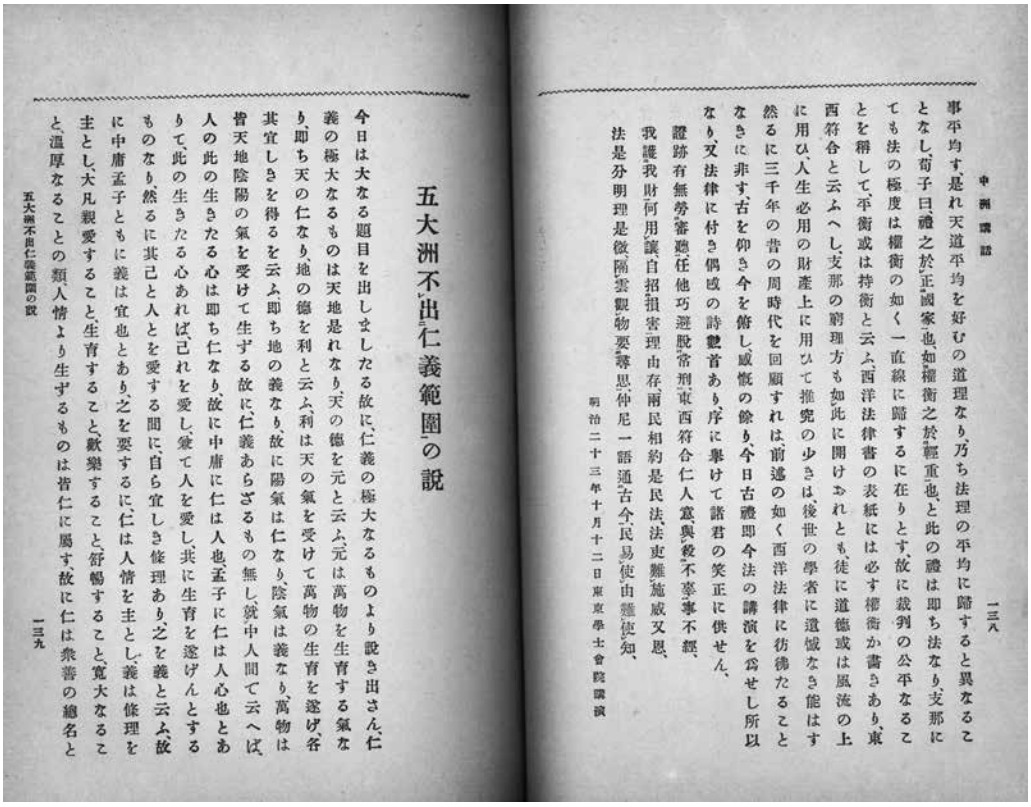
中洲講話　一一〇

## 古禮即今法の說

近來西洋法律の學か渡來以後、世間萬事、一も法律二も法律と云ふこととなり、都下幾萬の生徒も、過半は此學に從事し、政府にても、時に應じ憲法を始め種種の行政法を陸續發布せられ、刑法治罪法は數年前より行はれ、今年は裁判所構成法、民法訴訟法も引續き發布され、我が國の法律も大凡具備し、眞に所謂郁郁乎として文哉とも云ふ可き、難有世とはなりぬ、然るに東洋古代支那三代以上を回顧するに、一も禮二も禮と云ふて、嚴威儀揖讓のみにて、郁郁の文明を致したる如く見ゆれども、其實際を察するに、人民苟も衆合したる上は、法律なしに治まるものには非ず、故に禮の中に法律は皆含有して在り、然れば今の法は即ち古の禮古の禮は即ち今の法にして、古今精粗詳略の異はあれども、其理は一なる事を、今日講演して諸君に質さんとするなり、

禮の根原を說かんとすれば、陳腐ながら道德より說かざるを得ず、孟子に禮の實は節文斯二者也とあり、此二者とは仁義是れなり、註に曰く、蓋因人心之仁義而爲之品節使各得其敘之謂禮、荀子に仁愛也故親、義理也故行、禮節也故成、とあり、仁の愛を行ふに當り義にて條理の宜きを切り盛りせざれば、仁も條理を外れて過不及か出來て、終には行はれずと云ふなり、說文に禮、履也とありて、義の條理を人の身にて履み行へは、節序あり文章あり、秩然燦然として、人の德行成就す、故に禮は義の條理が人の履行上に見はるゝものを云ふなり、然るに古代は天地及ひ先祖の鬼神を第一に尊崇したるもの故に、仁義を行ふに鬼神より先きなるはなし、故に禮の字は示に從ひ豊に從ひ、鬼神を祭るに供物等を豊かにし、行儀作法の節文あることを形容して製したるものならん、堯典に典三禮とありて、天地人の三つの鬼神を祭るの禮を云ふ、即ち是なり、其れより皐陶謨に至りては自我五禮とありて、吉凶軍賓嘉の五つのものを稱せり、是に於て禮の區域が稍廣くなれり、此の位が元來禮の本分ならん、然るに後世追々其區域が廣まり、周に至りては、凡そ彼の義の條理が人の履行に見はるゝことは皆禮と云ふて、猥り五禮に止まらざるに似たり、論語中に所謂殷因於夏禮、周因於殷禮、博文約禮、非禮勿視聽言動等





中洲講話　一三八

事平均す、是れ天道平均を好むの道理なり、乃ち法理の平均に歸すると異なることなし、荀子曰、禮之於正國家也、如權衡之於輕重也、と此の禮は即ち法なり、支那にても法の極度は權衡の如く一直線に歸するに在りとす、故に裁判の公平なることを稱して、平衡或は持衡と云ふ、西洋法律書の表紙には必ず權衡か書きあり、東西符合と云ふへし、支那の處理方も如此に開けおれとも、徒に道德或は風流の上に用ひ、人生必用の財產上に用ひて推究の少きは、後世の學者に遺憾なき能はず然るに三千年の昔の周時代を回顧すれは前述の如く西洋法律に彷彿たることなきに非す、古を仰き今を瞰し、感慨の餘り、今日古禮即今法の講演を爲せし所以なり、又法律に付き偶感の詩數首あり、序に擧けて諸君の笑正に供せん、

證跡有無勞審處、任他巧避脫常刑、東西符合仁人意、與奪不辜事不經、
我讀我財何用讓、自招損害理由存、兩民相約是民法、法吏難施感又恩、
法是分明理是徵、隔雲觀物要尋思、仲尼一語通古今、民易使由聖使知、

明治二十三年十月十二日東京學士會院講演

## 五大洲不出仁義範圍の說

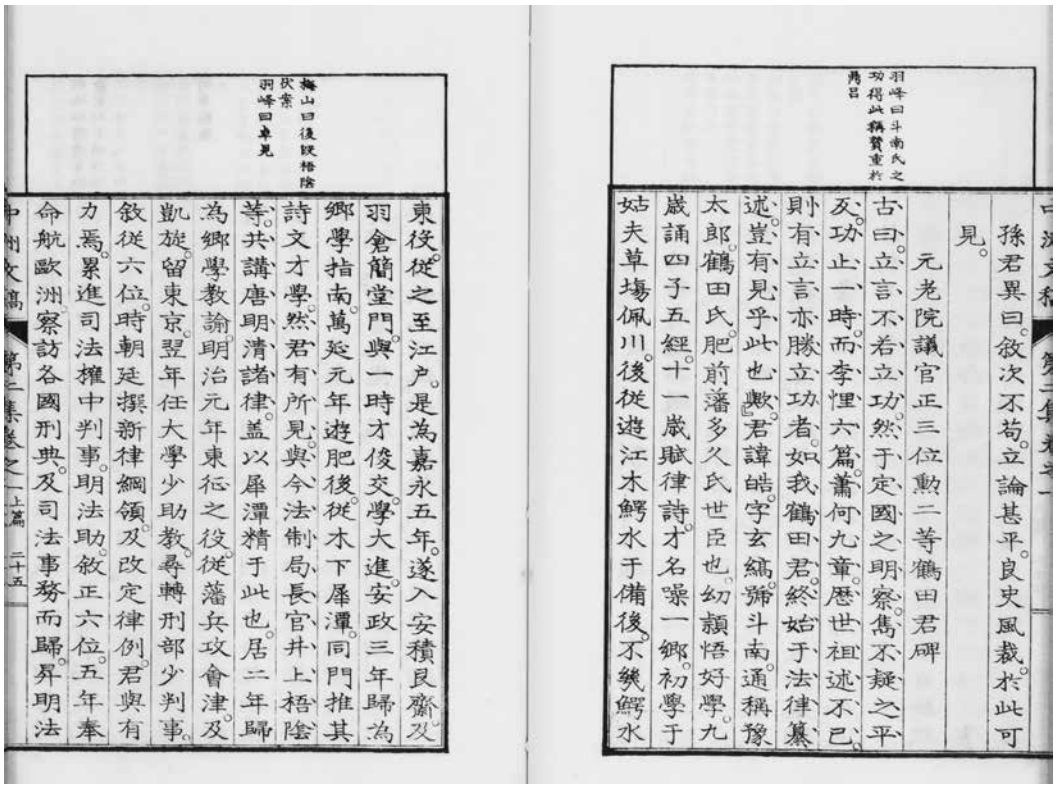
今日は大なる題目を出しなしたる故に、仁義の極大なるものより說き出さん、仁義の極大なるものは天地是れなり、天の德を元と云ふ、元は萬物を生育する氣なり、即ち天の仁なり、地の德を利と云ふ、利は天の氣を受けて萬物の生育を遂げ、各其宜しきを得るを云ふ、即ち地の義なり、故に陽氣は仁なり、陰氣は義なり、萬物は皆天地陰陽の氣を受けて生ずる故に、仁義あらざるもの無し、就中人間て云へば、人の此の生きたる心は即ち仁なり、故に中庸に仁は人也、孟子に仁は人心也とありて、此の生きたる心あれば、己れを愛し、兼て人を愛し、共に生育を遂げんとするものなり、然るに其己と人とを愛する間に、自ら宜しき條理あり、之を義と云ふ、故に中庸孟子ともに義は宜也とあり、之を要するに、仁は人情を主とし、義は條理を主とし、大凡親愛すること、生育すること、歡樂すること、舒暢すること、寬大なること、温厚なることの類、人情より生ずるものは皆仁に屬す、故に仁は衆善の總名と

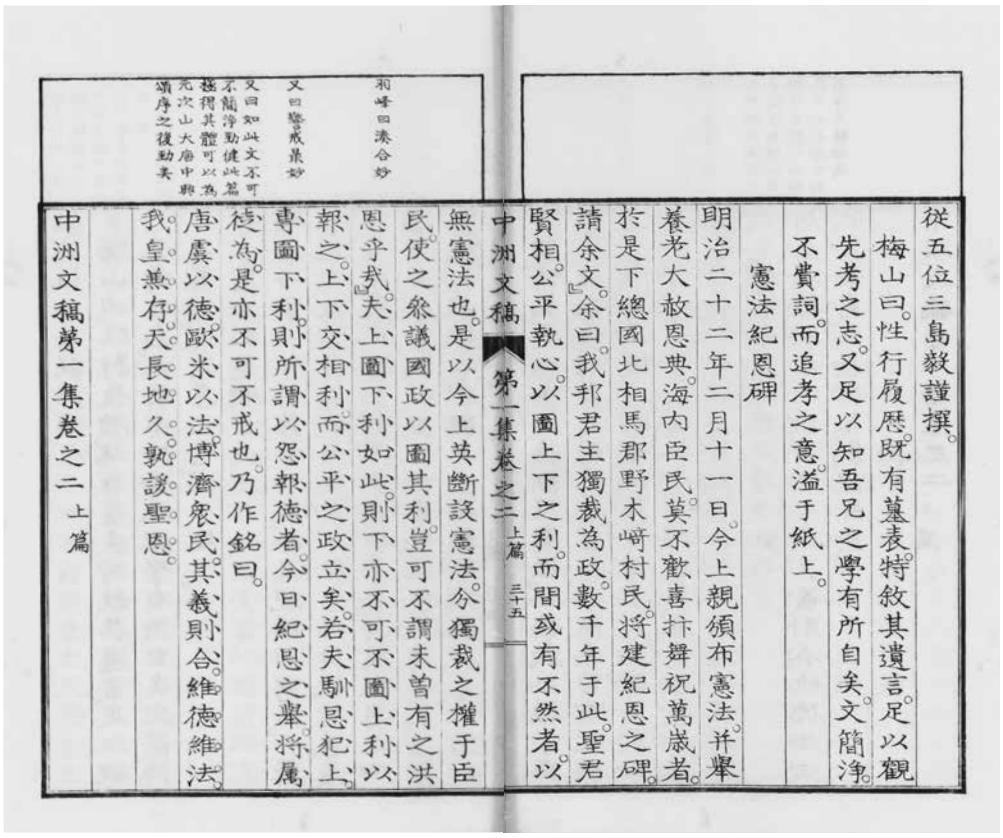


## *24* 三島中洲『中洲講話』一冊

明治四十二年　文華堂書店刊

『中洲講話』は三島中洲の講演をほぼ時系列に従って収録したもので、巻頭には明治十九年十月十日・東京学士会院所講の「義利合一論」が置かれている。「法」への言及がある講演としては、明治二十三年十月十二日東京学士会院所講の「古礼即今法の説」や翌二十四年五月十六日・斯文学会所講の「五大洲不出仁義之範囲の説」などがあり、民法典編纂に関与して漢学的素養に法学知識を兼ね備えたこの時期の三島中洲ならではの内容になっている。



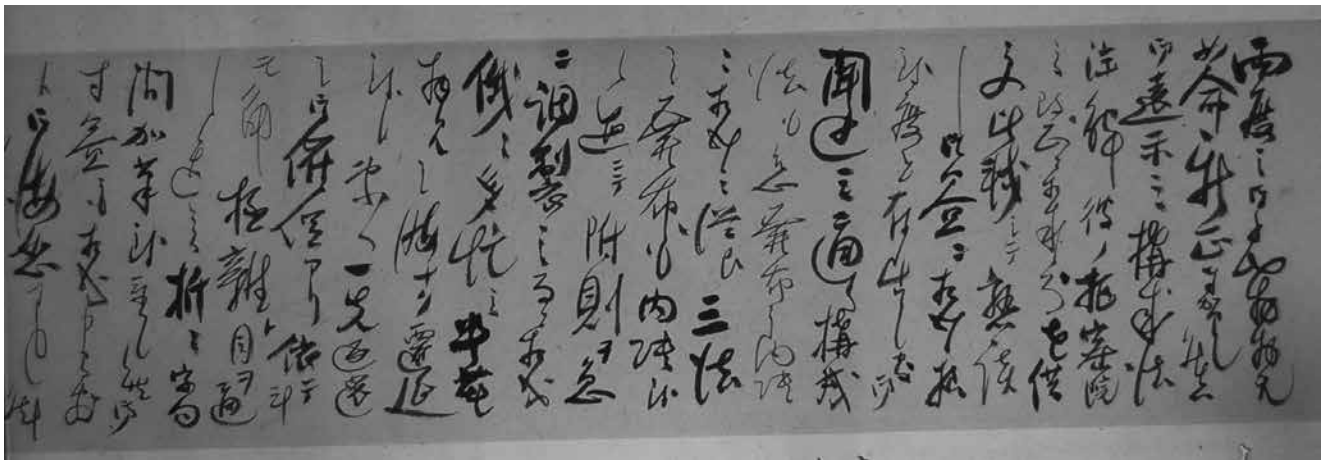


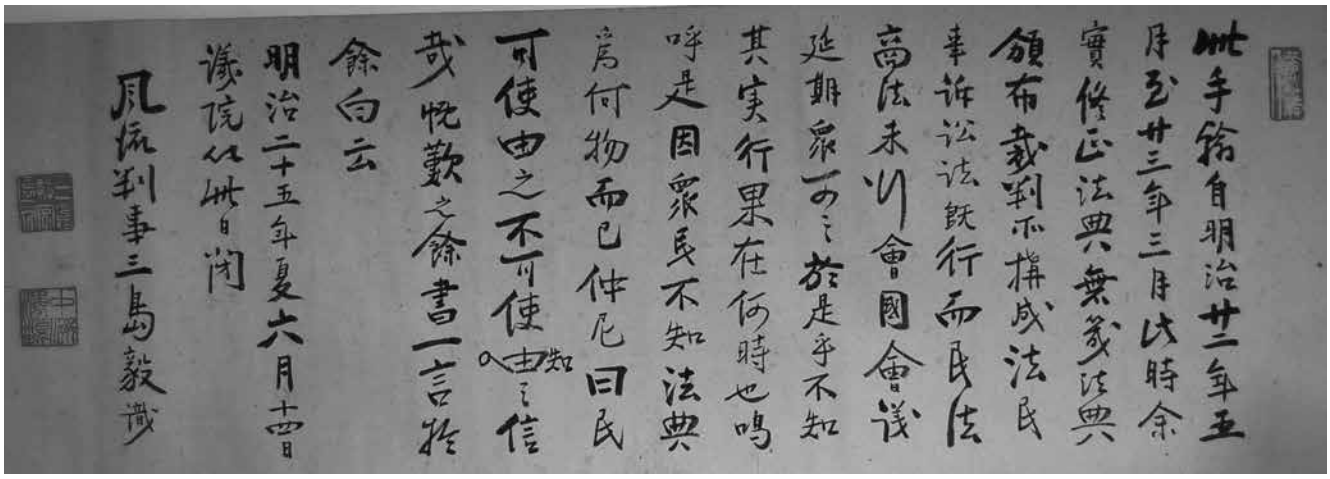
## 25 三島中洲『中洲文稿』第一集・第二集　各三巻三冊

明治三十一年　吉川半七刊

三島中洲の『中洲文稿』には、法曹関係者のために碑文も少なからず収録されている。

墓碑・墓碣では「故判事松原君碑」「故判事岡本君碑」「毅堂鷲津君碑銘」（以上第一集巻二下）、「大審院長従三位勲二等玉乃君神道碑」「元老院議官正三位勲二等鶴田君碑」（以上第二集巻一上）、「従二位男爵箕作君墓碑銘」。他に、憲法発布を記念した「憲法紀恩碑」（第一集巻二下）などがある。





## 26 三島中洲書簡巻（尾立維孝宛）一巻

明治二十二年五月五日から翌二十三年三月二十六日までの時期に書かれた、門人で法曹の尾立維孝に宛てた三島中洲書簡七通を収める。掲出部分（上段）は明治二十三年一月二十八日付で、尾立から著書『裁判所構成法注解』の校閲を依頼されたことに対する返書。裁判所構成法、民事訴訟法、民法、商法の発布がほぼ決定をみるなかで、法律条文の字句の修正に携わった三島中洲が多忙を極めていたことが分かる。しかしながら、この時民法・商法は施行されないまま経過し、民法はそのまま廃案となって、新たに民法が編纂されることになった。巻末の中洲の跋（下段）には、民法・商法の施行延期に対する「慨歎」が記される。

**書簡翻刻（部分）**「……御遠示之構成法注解、彼ノ枢密院ニ而改正ニ相成候分を借受、比較シテ熟読し、御益ニ相成候様致度と存居候處、御聞込之通り、構成法も愈発布之内決ニ相成候ニ従ひ、三法之発布も内決致候趣ニテ、附則ヲ急ニ調整之事ニ相成、俄ニ多忙ニ而、貴著拝見之暇ナク遷延致候處へ、一先返還之御催促アリ、依テ斗モ角、極雑ト目ヲ通し候迫ニ而、折々字句間加筆致置候へ共、御寸益ニも相成申間敷候。……」

**三島中洲跋（訓読）**（此の手翰は明治廿二年五月より廿三年三月に至る。此の時、余実に法典を修正し、幾ばくも無くして法典頒布す。裁判所構成法・民事訴訟法既に行はれ、而して民法・商法いまだ行はれず。たまたま国会にて延期を議し、衆之を可とす。是に於いてか其の実行の果たして何れの時に在るかを知らず。ああ是れ衆民の法典の何物為るかを知らざるに因るのみ。仲尼曰く、民は之を由らしむべく之を知らしむべからずと、信なるかな。慨嘆の餘、一言を餘白に書すと云ふ。明治二十五年夏六月十四日　議院此の日を以て閉づ。風流判事三島毅識す。）

# Ⅲ（関連書作品）

## 27 山田方谷書幅　七言絶句「（楠公）」　嘉永五年作

『山田方谷全集』第一冊「年譜」によれば、本詩は山田方谷が嘉永五年に江戸出府した帰途、五月に湊川を過ぎた時の作とされる。方谷四十八歳の作である。

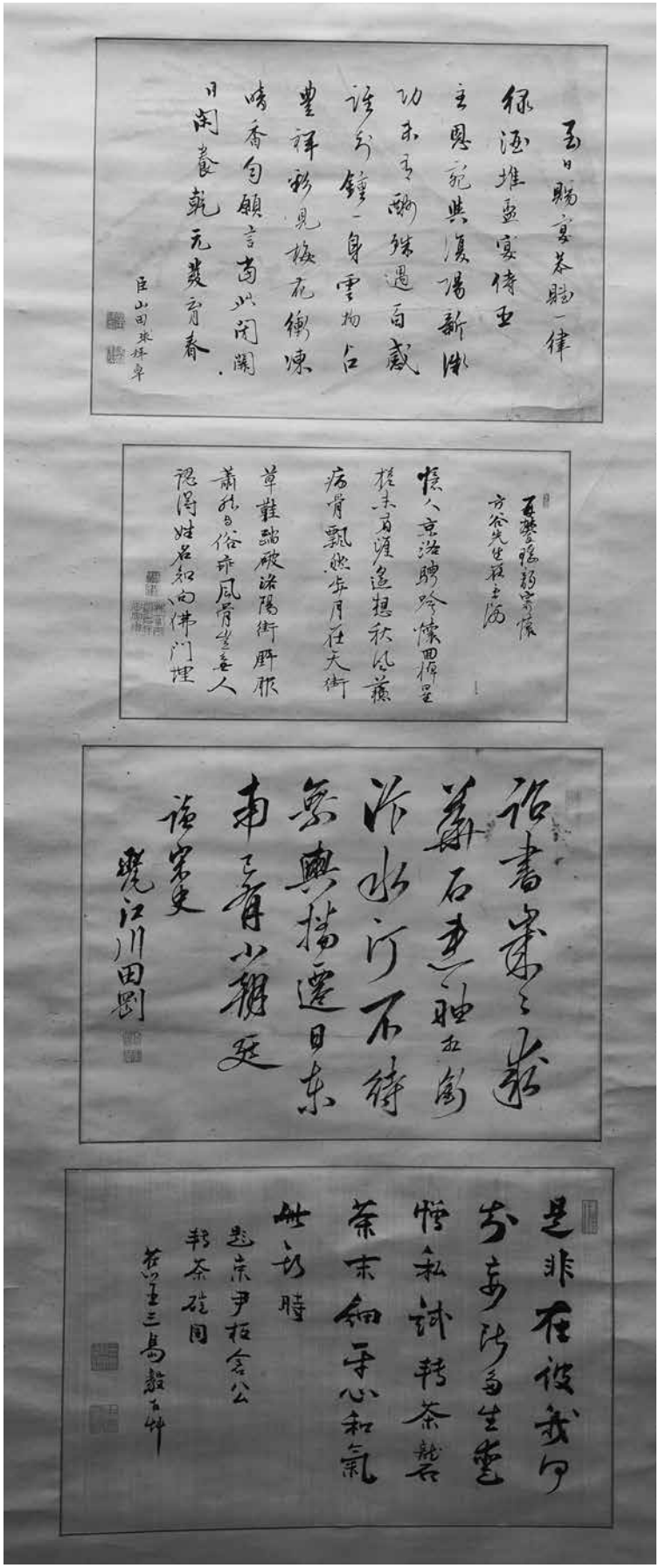
山田方谷は楠木正成を尊崇すること厚く、某人から楠正成画像に題言を求められた際に、この詩ともう一首の七絶を書付けたことがあった。この時更に、楠正成が七度生まれ変わって朝敵を滅ぼす（七生報国）と言って討死したことを踏まえて、建武から永禄までの歴史に照らして楠正成が転生した七人を推定して、その人物伝を執筆したという（楠公七生伝）。この伝は伝わらず、自序「楠公七生伝序」のみが伝わっている。

（翻字）
「（白文長方印）「瑞山／樵叟」
人間果結七生縁、牽到遙々永禄年、
姦賊子孫誅殺盡、忠魂此日始歸天。
方谷老士
（白文方印）「山田／球印」（朱文方印）「字／琳卿」」

## 28 備中松山藩儒者漢詩幅

備後福山の儒者五弓雪窓旧蔵にかかる備中松山藩の儒者たちの書を合装した書幅。

上から順に、山田方谷七言律詩、林抑斎七言絶句二首、川田甕江七言絶句、三島中洲七言絶句。

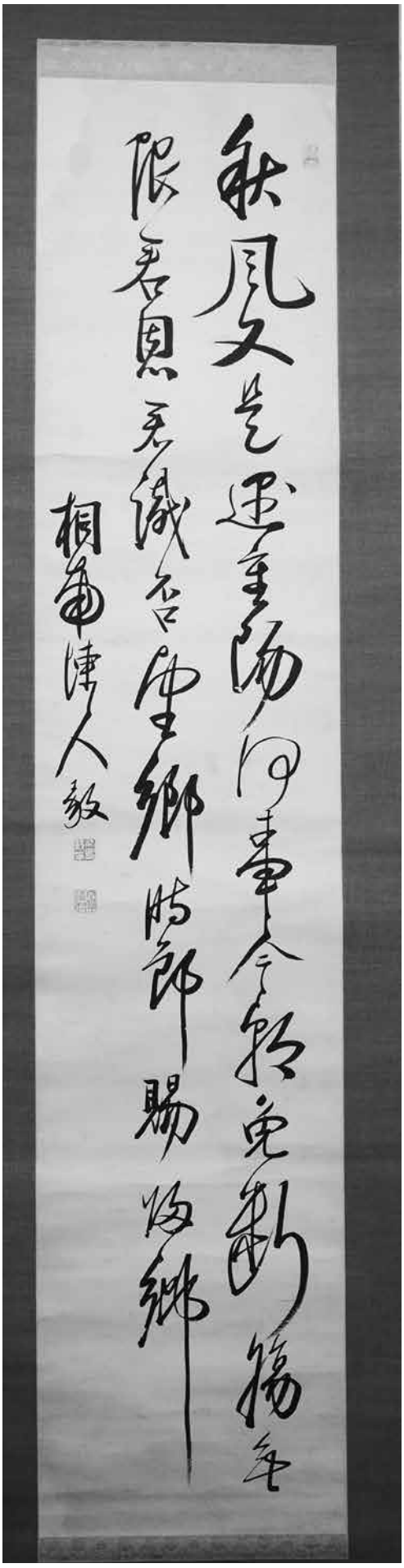


山田方谷（弘化元年作）
「至日賜宴恭賦一律。
緑酒堆盃宴侍臣、主恩宛与復陽新、
微功未有酬殊遇、百感誰知鍾一身、
雲物占豊祥彩見、梅花衝凍暗香匂、
願言当此閉関日、閑養乾元発育春。
臣山田球拝草
（白文方印）「山田／球印」「琳卿／氏」」

林抑斎
「牛隠」
再攀瑤韵寄懐方谷先生在京師。
憶人京洛聘吟懐、回棹星槎未有涯、
遥想秋風蘇病骨、飄然歩月在天街」
草鞋踏破洛陽街、野服蕭然与俗乖、
風骨豈無人認得、姓名知向仏門埋。
（白文方印）「林／保」「抑／斎」
（朱文方印）「林富太／郎名保／字定卿」」

川田甕江
「詔書歳々求華石、連舳相銜汴水汀、不待乗輿播遷日、東南已有小朝廷。
読宋史。甕江川田剛
（白文方印）「臣／剛」「毅／卿」」

三島中洲
「（白文長方印）「黄薇／人」
是非在彼我何知、妄断多生愛憎私、試転茶磨茶末細、平心和気此斯時。
題京尹板倉公轉茶碇図。
（白文方印）「三島／毅字／遠叔」
（朱文方印）「中洲／漁顧」

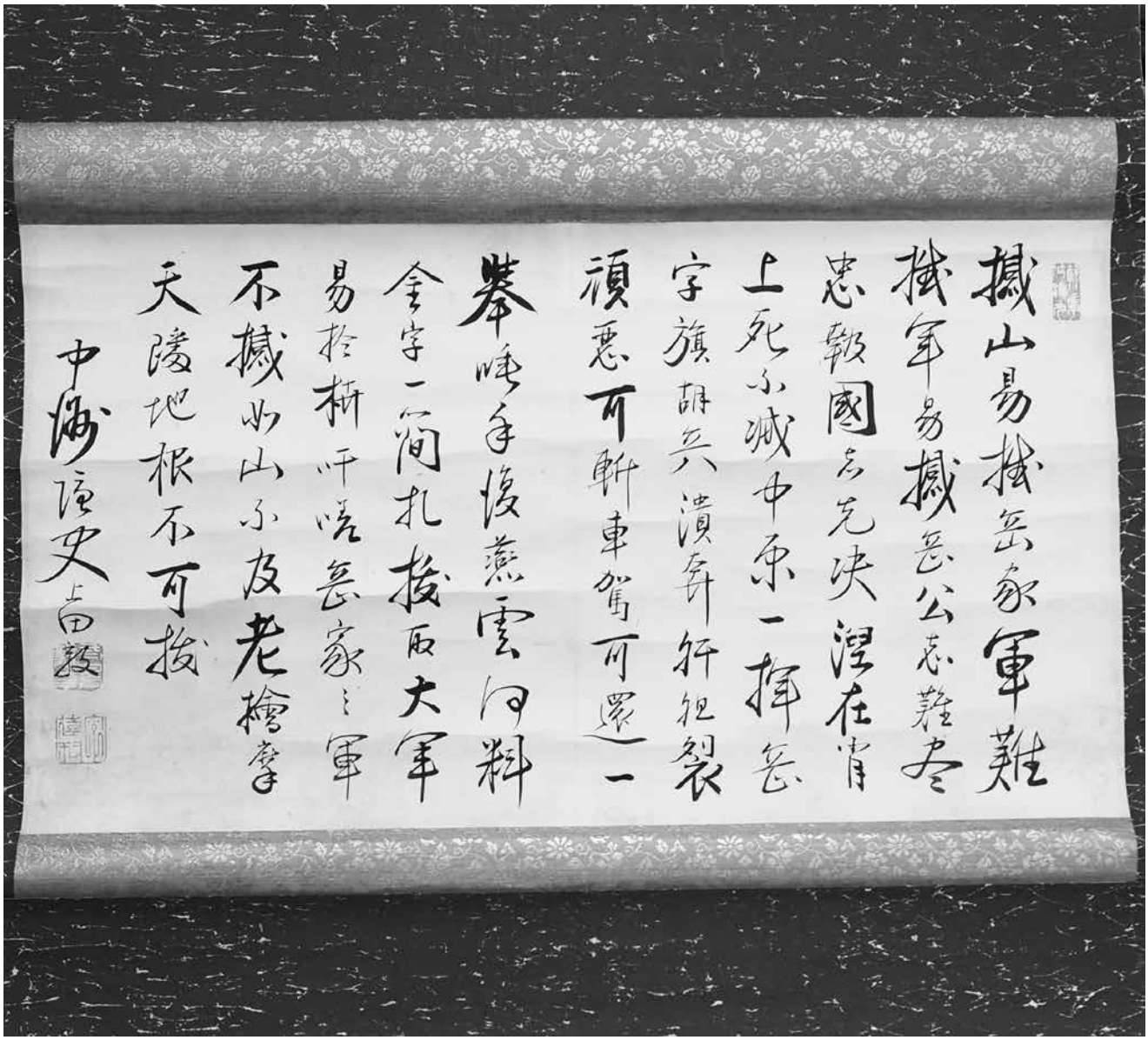


## 29 三島中洲書幅　七言絶句<br>文久三年（1863）九月作

『三島中洲詩存』に「九月有帰郷命喜賦」（247 七律、248･249 七絶）があり、248 番詩と類似するので、この詩の初出形と考えられる（248 番詩は「客窗又是遇重陽、何事今朝免断腸、無限君恩応記取、望郷時節賜帰郷」）。

なお、落款の「桐南」は三島中洲が用いた号のひとつで、備中窪屋郡中島村の生家に桐の古木があり、その南側に書斎を営んだことにちなむ。三島が中洲の号を使用するのは、明治三年（1870）四十一歳以降のことである。

（翻字）
「（白文長方印）「師古」
秋風又是遇重陽、何事今朝免断腸、
無限君恩君識否、望郷時節賜帰郷。桐南陳人毅
（白文方印）「三島 / 毅印」（朱文方印）「字 / 遠叔」」

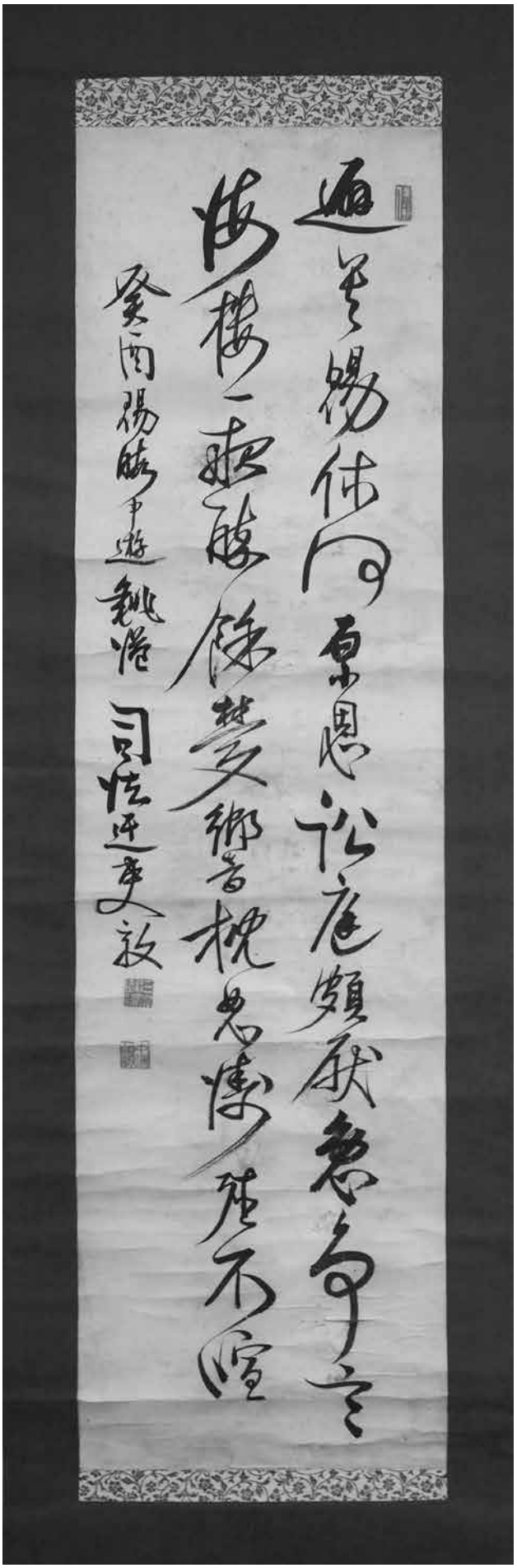



## 30 三島中洲書幅「（岳飛）」 明治三〜四年頃作

三島中洲は明治三年正月に備中高梁藩士の家督をまだ三歳の長子桂に譲り、遠祖上田孫次郎実親（三村家親の六男、鬼身城主）にちなんで上田姓を名乗り、また中洲と号するようになった。

本詩は、南宋初の名将岳飛（1103 〜 1142）を詠じたもので、岳飛軍の強さを讃えた「撼山易、撼岳家軍難」（宋史・岳飛伝）の表現を冒頭に用いて、三島中洲にしては珍しい長短句を混じえた詩句になっている。『三島中洲詩存』『三島中洲詩全釈』未収録。なお、岳飛を謀殺した宰相秦檜が金軍と和睦したことに対して、中洲は「義利合一論」の中でも、目先の正義にとらわれず恥を忍んで和睦したから後に復讐が実現できたと評価している。

（翻字）
「（白文長方印）「餘事 / 作詩文」
撼山易、撼岳家軍難、撼軍易、撼岳公志難、
尽忠報国志先決、涅在背上死不滅、中原一揮岳字旗、胡兵潰奔肝胆裂、
頑悪可斬、車駕可還、一挙唾手復燕雲、何料金字一簡札、抜取大軍易於桴、
吁嗟岳家之軍不撼如山、不及老檜摩天蟠地根不可抜。
中洲隠史上田毅 （白文方印）「三島 / 毅印」（朱文方印）「字 / 遠叔」」



## 31 三島中洲書幅 七言絶句「癸酉賜暇中遊銚港」 明治六年八月作

明治六年五月四日に新治裁判所長を拝命して土浦に赴任した三島中洲は、同年七月に初めて暑中休暇を賜る太政官布告に接した（奏任官以上十五日以内、判任官以下五日以内）。そこで、中洲は長男桂や同僚の長谷氏を伴って八月二十五日に土浦を発って、霞ケ浦を舟航する旅行に出かけた。潮来を経て香取神社に参詣し、利根川を下って銚子港に達し、酒楼観潮楼に投宿した。次いで鹿島神社や大洗磯前神社に参詣し、水戸で三日間滞在して偕楽園や弘道館を参観して九月二日に土浦に戻った。

本詩は銚子港の観潮楼における作である。酔余の揮毫かとも思われるが、「司法迂吏」という落款が珍しい。

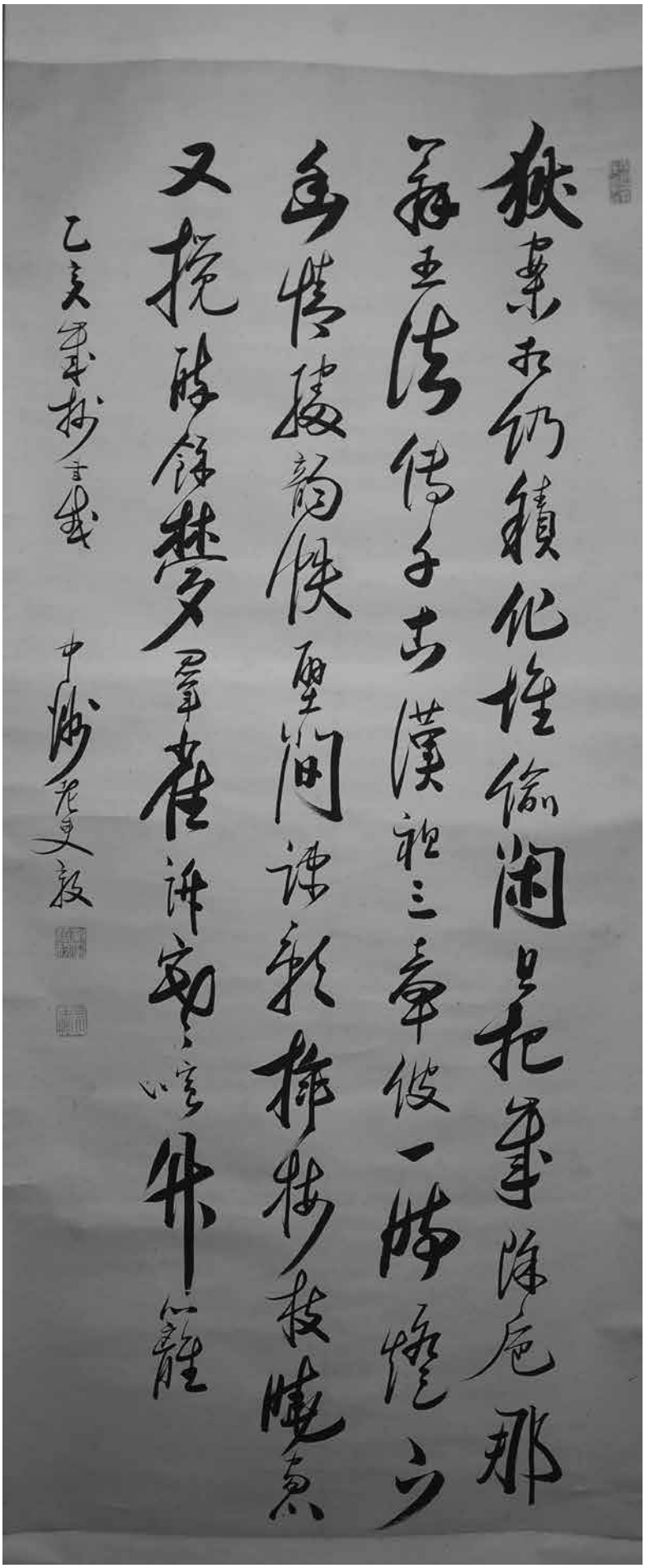
（翻字）
「（白文長方印）「黄薇／人」
避暑賜暇何厚恩、訟庭頗厭忿争言、
海楼一夜酔餘夢、響枕怒濤聴不喧。
癸酉賜暇中遊銚港。司法迂吏毅
（白文方印）「三島／毅字／遠叔」
（朱文方印）「中洲／漁顧」

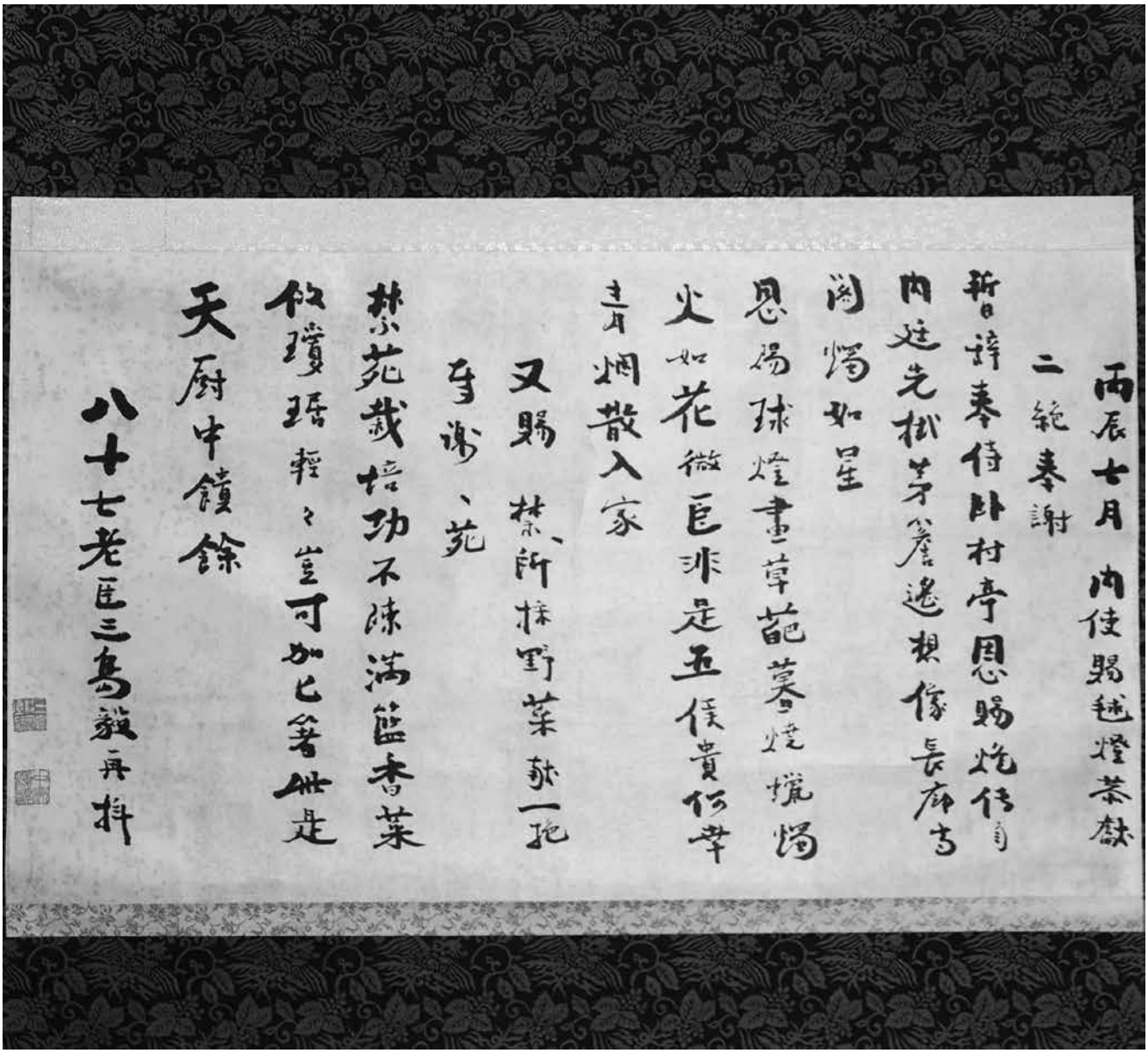
## 32 三島中洲書幅 七言律詩「乙亥歳抄書感」 明治八年十二月作

明治八年は四月二日に三島中洲が東京裁判所の聴訟を拝して土浦から東京に移った年である。六月に麹町区一番町四十六番地の土地を購入して居を構えた。以後、旧友中村敬宇・重野成斎・川田甕江・鷲津毅堂・阪谷朗廬らと文社を結び、また住居の近い南摩羽峰・川北梅山とは不断に詩文を評しあうようになった。

本詩は、日々の裁判官業務を髣髴させる「獄案」「那翁五法（ナポレオン五法―刑法・民法・商法・訴訟法・治罪法）」「漢祖三章」の詩句と、再開された文人交流を反映した「繙韵帙」の詩句が共存し、この時期ならではの表現になっている。『三島中洲詩存』『三島中洲詩全釈』未収録。

（翻字）
「（白文長方印）「書足以記／姓名而已」
獄案相仍積作堆、偸閑且把歳除巵、
那翁五法伝千古、漢祖三章彼一時、
灯火幽情繙韵帙、壁間疎影挿梅枝、
暁窓又攪酔餘夢、群雀訴寒喧竹籬。
乙亥歳抄書感。中洲老吏毅
（白文方印）「毅字／遠叔」
（朱文方印）「号／中洲」」




丙辰七月　内使賜毬燈茶菓
二絶奉謝
暫辞奉侍臥村亭恩賜灯伝自
内廷先掛茅簷遙想像長廊高
閣灯如星
恩賜球灯画草葩暮焼蜡燭火
如花微臣非是五侯貴何幸
青烟散入家
又賜禁苑所採野菜献一絶
奉謝
禁苑栽培功不疎満籃香菜
似瓊琚軽々豈可加匕箸此是
天厨中饋餘
八十七老臣三島毅再拝

## 33 三島中洲　七言絶句三首書幅 大正五年七月作

三島中洲の長男桂（号天香）は、米国に私費留学して帰国後さまざまな事業に手を染め多く失敗に終わった不肖の息子というべき人物。中洲が三子に資産分与した際、荏原郡大井町鴻塚里（大井庚塚町、現品川区大井）に所有した別荘を譲られてここに住まいした。中洲はこの地の海湾の眺望を愛して「絵原村荘」と命名し、大正期老境に入ってからは避寒に避暑にしばしば訪れている。本詩が作られた大正五年、中洲は八十七歳となったが、前年六月に転倒負傷して以来、大正天皇への進講を免ぜられており、一～三月の避寒に続いて、七～八月にも避暑のために絵原村荘に滞在していた。大正天皇から盆提灯と野菜が届けられたことを謝する詩。

（翻字）

「丙辰七月内使賜毬灯、恭献二絶奉謝。

暫辞奉侍臥村亭、恩賜灯伝自内廷、先掛茅簷遥想像、長廊高閣灯如星。」

恩賜球灯画草葩、暮焼蜡燭火如花、微臣非是五侯貴、何幸青烟散入家。」

又賜禁苑所採野菜、献一絶奉謝。

禁苑栽培功不疎、満籃香菜似瓊琚、輕々豈可加匕箸、此是天厨中饋餘。」

八十七老臣三島毅再拝　（白文方印）「三島 / 毅字 / 遠叔」（朱文方印）「中洲 / 漁顧」

## 34 三島中洲書幅 七言絶句「八十八自寿作」 大正六年作

八十代に入っても三島中洲の詩文創作の意欲はほとんど衰えることなく、詩について言えば八十歳（1909）で九十五首、八十一歳（1910）で八十二首、八十二歳（1911）で三十四首、八十三歳（1912）で五十八首、八十四歳（1913）で三十五首、八十五歳（1914）で八十八首、八十六歳（1915）で十一首、八十七歳（1916）で四十三首、八十八歳（1917）で四十三首、八十九歳（1918）で八首、九十歳（1919）で九首の作品を残している。八十八歳を迎えたこの年は、年始以来、自寿の作品を多く作っている。『三島中洲詩存』所収作（不知司命有邪無、寿福偶然帰老儒、餐是烟霞忘嗜好、児雖豚犬足馳駆、察地観天開眼目、塞源抜本運工夫、与誰共語同斯中楽、回首西方蓮嶽孤）と比べると幾つかの異同があり、推敲を重ねていたことが分かる。

（翻字）
「（白文長方印）「読書楽」
不知司命有邪無、寿福偶然帰陋儒、
餐是烟霞忘嗜好、児雖豚犬足馳駆、
察地観天開眼目、塞源抜本費工夫、
世間与誰同此裡樂、回首西方富嶽孤。
八十八自寿作。
第六句改作世間誰識此中楽。
中洲
（白文方印）「三島／毅印」
（朱文方印）「字／遠叔」」

# Ⅳ（資料編）

## 『三島中洲書簡巻（尾立維孝宛）』

（翻字）

**①（明治二十二年五月五日付　三島中洲書簡　尾立維孝宛）**

拝見仕候。愈御安健奉賀候。老生頑健、御降心可被下候。然者、貴著序文御依頼、致承知候。乍去、萬一其節多事、出来不申節ハ、詩ハ必ス題し可申候。大臣題詞云々、相願見可申候へ共、別而多忙故ニ、不相叶義も難斗、此段御承知置可被下候也。　五月五日　毅　尾立君

再啓、老生モ出為吏、入為師、為衣食奔走、多事倍前年。然トモ幸ニ鬘鑠、御安慮可被下候也。

**②（明治二十二年九月二十九日付　三島中洲書簡　尾立維孝宛）**

秋冷中、愈御安静奉賀候。先般以来ハ毎々御状被下候処、熱海遊浴中ニ而晩ク拝見致候。帰京後も斗角多忙ニテ返書延引、御海恕可被下候。然ハ構成法注解ヲ老生添削云々、致承知候へ共、何分多忙、熟覧之間モ有之間敷と存候。乍去、壱本御越被下候へは、雑トニテモ一閲シ、氣付候事ハ可申上候。〇御旧國帆足翁墓参繁昌之事、于誠奇ナルコトニ御座候。然し翁之徳ナクンハ此結果ナシト欽仰之至ニ御座候也。　九月廿九日　中洲生　尾立賢兄

山田大臣題字云々も致承知候。界紙御越置可被成候也。

尚々犬塚君へ宜敷御致声可被下候也。

**③（明治二十三年一月二十八日付　三島中洲書簡　尾立維孝宛）**

両度之御手帋拝見。如命、新正奉賀候。然者、御遠示之構成法注解、彼ノ枢密院ニ而改正ニ相成候分を借受、比較シテ熟読し、御益ニ相成候様致度と存居候處、御聞込之通り、構成法も愈発布之内決ニ相成候ニ従ひ、三法之発布も内決致候趣ニテ、附則ヲ急ニ調整之事ニ相成、俄ニ多忙ニ而、貴著拝見之暇ナク遷延致候處へ、一先返還之御催促アリ、依テ斗モ角、極雑ト目ヲ通し候迄ニ而、折々字句間加筆致置候へ共、御寸益ニも相成申間敷候。御海恕可被下候。然し貴兄法学御熟達ニハ感心仕候。甚遺憾之事ニ候へ共、今日返上致候。第二冊ハ今数日留置、一通目丈通し、返上可仕候。匆々不一。　毅

一月廿八日　尾立賢契

**④（明治二十三年二月十三日付　三島中洲書簡　尾立維孝宛）**

愈御安祥奉賀候。過日ハ御返書被下、御預り之貴著緩々熟読致候様御申越ニ付、其積りニ而改正之分ト照合せ熟閲楽居候得共、斗角急場之事多ク、為其ニ因循致候内ニ構成法モ果シテ發表シ、是ハト驚キ、最早熟閲之間モ無之、一夜間ニ雑ト一閲、少々加筆返上致候。乍不本意、前條之次第故、御海恕可被成候。一、大臣之題字者、相願可申ニ付、紙ノ寸法早々御申越可被下候。老拙も何か数言申度ト存候。モシ多用ニ而間ニ合不申節ハ、兼テ御申越之詩ニ而も題し可申候。匆々不一。　中洲　二月十三日　尾立賢兄

**⑤（明治二十三年三月九日付　三島中洲書簡　尾立維孝宛）**

毎々御状被下、致拝見候。出板ハ御地ニ而出来候よし、大ニ致安心候。題字序文御急キ之事承知。其後二度も大臣邸へ参り催促スレトモ于今不出来、何分大臣も多用故ニ申上兼候。是ニハ困却々々。併シ又々催促可仕候。拙序も何卒真面目之文拵候積り之處、斗角公私多忙ニ付、昨日半日之休暇、来客ヲ謝シ簡短ナル小序別絹之通り相綴り、差出申候。粗劣之段、御海恕可被下候。頓首。　毅　三月九日　尾立君侍曹

**⑥（明治二十三年三月十三日付　三島中洲書簡　尾立維孝宛）**

拝見仕候。題字固ヨリ小生相選ひ、出置候事ニ御座候。今日モ又催促相迫り可申候。民法將發之堺ニテ、大臣甚多忙困入候。却説、小生之序末ニ、中洲半隠士三島毅と書キ候様ニ覚へ申候。其心、近来之再仕ハ得意ニテ出タルニ非ス。唯隠居仕事ト思ヒ小遣ひヲ取ル位ニ思居候故、不斗右様認メ候へ共、世間正面ヨリ官名ヲ見レハ非議ヲ免カレズト思付候間、未タ刻前ナレハ、中洲三島毅トシテ、半隠士ノ三字ハ御省キ可被下候。然シ刻後ナレハ其儘ニ而宜敷御座候也。　三月十三日　毅　尾立君

**⑦（明治二十三年三月二十六日付　三島中洲書簡　尾立維孝宛）**

毎々御状被下、拝見仕候。右大臣題字一件も決而油断不致、其後数度及催促と申候も、兼而申上候通、新法頒布前、又御發輦前、旁ニ而大臣も殊之外多忙、イツ参り而も公事伺候人之車満門、故ニ私事ニ而煩面謁も氣之毒ニ而、取次迠申入置候へ共、埒明不申ニ付、一昨日ハ強テ請謁及催促候處、右構成法注釈之題字ハ何卒断り呉トノコト、其故ハ本省草案ニ付、拙者題字ハ證據ニ相成との義ナリ。大ニ失望ナレトモ強テモ難願、御氣之毒千萬之事ナリ。元来、犬塚氏ヨリ已ニ頼有之と御申越候ニ付、大臣ハ夙ニ承諾之事と相考へ、最初承諾否之決ヲ取ラズ唯絹本ヲ出し、固より書取ハ添へ置タリ。今日ニ至り被断、残念千萬之事ニ御座候。不悪御承知可被下候。乍去、大臣被断候と申事ハ世上へ發兌之御都合も不宜と御察し申上候間、大臣多用ニ而急速ニ不出来と申事ニ而早ク御發兌可然と存候。其実大臣多用之時ナラズハ緩々説キ候へば出来も難致存候共、何分多忙ナリ。僕等も昨夜抔ハ夜半迠修正シ、大臣も被見廻候位之事ナリ。今日ハ清書奏上、御發輦前ニ三法とも御裁可ニ相成候事と被察候。併シ發布ハ来月ナラント被察候。右等混雑之際ニ付、何分御勘弁可被下候也。　三月廿六日　毅　尾立君

（封筒）＊大坂東区石町壱丁目十八番屋敷　尾立維孝殿　拝復　東京麹町區壹番町四拾五番地　三島毅

〆　五月五日　（消印）「摂津大坂／〈欠欠〉年五月／〈欠〉日」

**⑧（明治二十五年六月十四日付　三島中洲跋）**

（印記）「黄薇人」

此手翰、自明治廿二年五月至廿三年三月、此時余實修正法典、無幾法典頒布。裁判所構成法、民事訴訟法既行、而民法商法未行。會國會議延期、衆可之。於是乎、不知其実行果在何時也。嗚呼、是因衆民不知法典爲何物而已。仲尼曰、民可使由之、不可使知之、信哉。慨歎之餘、書一言於餘白云。明治二十五年夏六月十四日　議院以此日閉　風流判事三島毅識

（印記）「三島／毅字／遠叔」「中洲／漁顧」

＊書簡⑦の末に位置する封筒は、日付から判断して書簡①の封筒である。

**参考資料**

・福島正夫「在朝法曹期の三島中洲」『福島正夫著作集』第一巻、一九九四。
・村上一博「明治初期における一裁判官の法意識―三島中洲の『民事法律聞見随録』と質地論―」『明治大学社会科学研究所紀要』三二巻二号、一九九四。
・霞信彦「新治裁判所在勤・司法少判事三島毅の一側面」『三島中洲の学芸とその生涯』雄山閣出版、一九九九。
・下村泰三「司法省における「会議」と三島中洲」『二松学舎大学人文論叢』第八七輯、二〇一一。
・三島中洲『中洲文稿』第一集・第二集、吉川半七発行、一八九八。第三集、博文館発行、一九一一。第四集、二松学舎発行、一九一七。
・三島中洲『中洲講話』文華堂書店、一九〇九。
・「中洲三島先生年譜」『二松学舎六十年史要』、財団法人二松学舎刊、一九三七。
・山田準編『山田方谷全集』山田方谷全集刊行会発行、一九五一。
・山口角鷹『三島中洲―二松学舎の創設者』学校法人二松学舎、一九七七。
・『三島中洲詩全釈』全五巻、石川忠久編、二松学舎刊、二〇〇六～二〇一九。

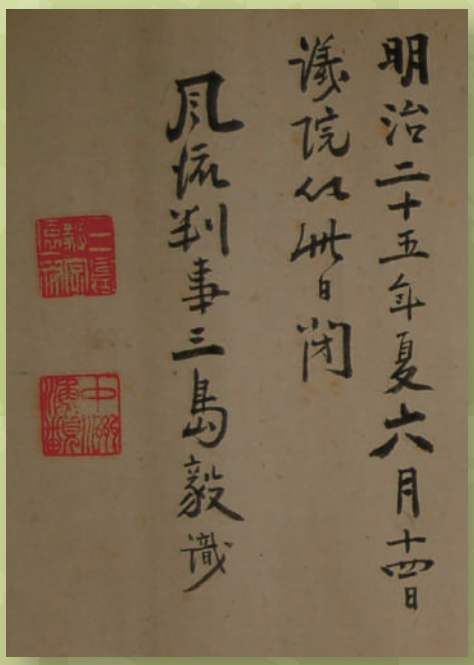
## 編集後記

企画展「三島中洲と近代」も今回で十回目を迎える。そこで、筆者の専門領域とはかなりかけ離れているが、敢えて三島中洲の法律関係資料を取りあげることとした。ここに紹介したような明治初期の法律関係資料が本学に残されていることをより多くの方々に知っていただきたい、専門の方々に興味を持っていただきたいと考えたからである。また、漢学塾二松学舎は多くの有為な人材を輩出したが、とりわけ司法省法学校進学者たち（尾立維孝、国分三亥、荘田要二郎、能勢萬、織田萬、岡村司、田島錦治ら）の存在は重要であるし、渋沢栄一の没後に第四代舎長に金子堅太郎が就任していることの理由も従来必ずしも説明されていないように思う。三島中洲の思想を考えるときにまず想起される「義利合一論」も、陽明学だけでなく、法学のことも視野に入れる必要があるだろう。などなど究明すべき課題がまだまだ残っているように思うからである。二月二十五日（火）十三時三十分～十五時には講演会「三島中洲の法律関係資料が物語るもの」の開催を予定しているので、ぜひご来聴いただき大方のご垂教を請う次第である。最後になるが、いつもながら図書館諸氏、丸善雄松堂の山崎和正氏に多大なご協力をいただいた。深甚なる謝意を表する。

（町　泉寿郎）

三島中洲と近代　其十
**三島中洲の法律関係資料**
発行日　令和七年二月一七日
編集者　大学資料展示室運営委員会
発行者　二松学舎大学附属図書館
〒一〇二―八三三六
東京都千代田区三番町六―一六
印刷
製本　株式会社　サンセイ

（非売品）
2023 ©




二松学舎大学　〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16